

近代中国における貿易金融の一考察

——一九世紀前半の銀価騰貴と外国貿易構造の変化——

浜下武志

はじめに

一、一九世紀前半の銀貴問題と銀流出の性格

二、多角的貿易決済機構と為替の役割

三、貿易構造の変化と△現物取引▽

おわりに

はじめに

近代の中国は、国内経済・外国貿易共に銀を主要な決済手段とする銀中心国⁽¹⁾であった。しかし、一九三五年の幣制改革までは、銀相場に対して強制力をもつ制度的規制が存在しなかったことから、銀流通は、地金であれ、鑄造貨幣であれ、原則としてその金属成分の価値に直結して価格が形成されると共に、これを通じて、中国金融市場は世界市場における銀価の変動の影響を直接に蒙った。それ故、それは、世界市場の銀流通に支えられた列強資本主

義が中国市場を開放し掌握しようとするに当って、貨幣・金融面での進出を容易にし、かつ重要ならしめる歴史的条件をなしていた。

このような歴史的背景の下で、中国における一九世紀末までの外国銀流出入の史的過程は、四期に区分される。⁽²⁾

一、一六世紀末以降一八三〇年に至る流入期。スペイン・ポルトガル両国による銀の流入を経て、オランダ・イギリスの扱う銀の流入が優位を確立する。

二、一八三〇—一八四〇年代末の流出期。イギリス東インド会社による対インド貿易独占の廃止に伴うインドに対するイギリス工業製品の輸出の増大、そして、これに裏付けられたインド・アヘンの中国への流入の増大により、中国、アジア地域から銀が流出した。

三、一八五〇年前後から流入に転ずる。これに伴って、一八六〇年代末まで、列強の中国に対する本格的な金融的進出期であり、イギリスを中心とする外国銀行がその活動基盤を築いた。

四、一八七〇年代初頭以降、ヨーロッパにおける金本位制の拡大に伴い、アジアへの銀流入は増大し、その流通をめぐって、列強のアジアにおける通貨権獲得競争が展開される。⁽³⁾

右のうち、中国において、銀が主要な貨幣金属でありながらその供給を外国に仰ぐという矛盾の結果は、第二の銀流出期に集中的に現われた。即ち、貿易にあつては決済手段としての銀の不足からくる銀貴、国内にあつては流通手段としての銀の不足からくる銀貴・錢賤の発生である。このことはまた、銀流通を直接には掌握していない清朝財政が、銀中心で徴税・運営されていることの矛盾をも露呈させた。加えて、制錢の品質低下、私鑄錢の増加に

よる錢価下落が、その矛盾をいっそう拡大していった。⁽⁴⁾

本稿では、外国貿易と密接に関連する、この一八三〇—四〇年代の銀貴問題を、四〇年代後半を中心に検討する。そして、銀の中国からの流出が、当時の外国貿易の構造的変質の帰結としてあるのみならず、むしろそれが起点となつて、そこからの新たな貿易金融関係の展開が、中国経済社会に対する諸外国の進出と掌握とのあり方、ならびにこれに基く中国国内金融市場の変質について、その歴史的特質を規定していった事実を明らかにしたい。

一、一九世紀前半の銀貴問題と銀流出の性格

銀流出を原因とする銀貴問題について、一九世紀前半期の中国には、大別して次の二つの認識があつた。即ち、
一、アヘンの対価として現銀が支払われ、その結果として惹き起こされる銀流出による銀減少 \parallel 銀貴という認識と、
二、低品位の外国銀貨が、高品位の中国の紋銀（純度九四—九八%。馬蹄の形から馬蹄銀 *Spree* と通称される）に対し、秤量貨幣の原則を逸脱して等価以上の価値をもって交換されるため、投機によって紋銀が持ち出されることから起こる紋銀減少 \parallel 銀貴という認識（一二五頁に後述。とくに註(19)参照）とである。

まず前者について見ると、鴻臚寺卿黃爵滋は道光十八（一八三八）年閏四月に、

臣竊見近年銀価遞增、每銀一兩易制錢一千六百有零、非耗銀於內地、實漏銀於外夷也。蓋自鴉片流入中國、我仁宗睿皇帝知其必有害也、故詔誠諄諄、例有明禁。然當時臣工亦不料其流毒至於此極、使早知其若此、必有嚴刑重法遏於將萌。查例載、凡夷船到店、必先取其洋商保結、保其必無夾帶鴉片、然後准其入口。爾時雖有保結

表 1 中国からの銀流出

年	流 出 額	指摘者	収 録 書
道光3年 (1823)以 前	数百万両	黄爵滋	(1)仙屏書屋初集年記卷廿三 (2)道光朝籌辦夷務始末 (以下、黄爵滋について は上記の二書のいずれか より引用)
4	1千7・8百万両	〃	
5	〃	〃	
6	〃	〃	
7	〃	〃	
8	〃	〃	
9	{ 1千7・8百万両 数百万両	黄爵滋 章 沅	東華錄
10	1千7・8百万両	黄爵滋	
11	2千余万両	黄爵滋	
12	{ 2千余万両 数百万両	黄爵滋 孫蘭枝	林文忠公政書
13	2千余万両	黄爵滋	
14	{ 2千余万両 2千余万両	黄爵滋 梁廷枏	夷氛紀聞
15	2千余万両	黄爵滋	
16	{ 2千余万両 2千余万両 1千万両以上	黄爵滋 袁玉麟 許乃济	籌辦夷務始末 籌辦夷務始末
17	{ 広東海口より3千万 福建・浙江・江蘇各千万を下らず 天津より2千万	朱成烈	皇朝統文献通考
18	{ 英夷輸入値2千2百万元 米夷輸入値9百60万元	魏 源	海国図志
18	{ 広東海口より3千万両 福建・浙江・山東・天津計数千万両	黄爵滋	
21	4・5千万両	包世臣	斉民四術
26	数千万	許 楣	鈔幣通論
咸豊1年 (1851)	数千万	馮桂芬	顯志堂稿

資料：太平山人「道光朝銀荒問題」『中和月刊』第一卷八期，1940年8月，64頁。

近代中国における貿易金融の一考察

浜下

表 2 1847年、中国の貿易収支
(オルコックの概算)

イギリスの対中国輸出	1,000万ドル
輸入	2,000万ドル
イギリスの入超	1,000万ドル
アメリカの対中国輸出	300万ドル
輸入	900万ドル
アメリカの入超	600万ドル
インドの対中国アヘン輸出	2,300万ドル
棉花輸出	500万ドル
輸入	200万ドル
インドの出超	2,600万ドル
イギリス・アメリカの入超	1,600万ドル
中国の入超・正貨支払	1,000万ドル

資料: BPP., *Returns of the Trade of the Various Ports of China, for the Years 1847 and 1848*, pp. 72-73.

視為具文、夾帶斷不能免。……自道光三年至十一年、歲漏銀一千七、八百万兩、自十一年至十四年、歲漏銀二千余万兩、自十四年至今、漸漏銀至三千万兩之多。此外福建・江・浙・山東・天津各海口、合之亦数千万兩。⁽⁶⁾

と述べ、禁令や監督の効なく、アヘンの輸入によって銀が外国商人の手に渡ることによる銀減少⁽⁷⁾銀貴を説いた。ここでは、アヘンの代価支払額が即ち銀の流出量であるかの如き、両者の直接的対応関係が論ぜられている。いま、中国側資料から銀の流出量を概算すると、表1の如

く、一八二〇—四〇年代における合計は約四億八千万兩となる。しかし、この数字は、多分にアヘンとの直接的対応による流出のみを論ずる結果、後述のインド側の数字の一〇倍にも及び(表3参照)、また、中国における銀流通量が、道光年間に約五億万ドル(約三億六千万兩)⁽⁶⁾、流入期の咸豊中期でも年間四億ポンド(約一二億兩)⁽⁷⁾であったという記録と照らしあわせると、その四〇〜一三〇%が流出したこともなっている。従って、銀流出が、茶・生糸貿易による銀流入によって如何に補填されていたのかという問題、即ち、決済額の流出入がその結果としてもたらされるにすぎないところの、貿易全体の構造の特殊な性格そのものこそ、実は問題ではないであろうか。⁽⁸⁾

貿易とその決済手段としての正貨 specie との関係は、一八四七年の駐上海イギリス領事 R 二オルコックの報告に示された貿易概算の中に見ることが出来る。それは、

中国貿易の大部分は、それが外国側の整理勘定に影響を及ぼす範囲について言えば、イギリス・インド・アメリカとの取引から成立しているということが正しく指摘されてはきた。しかし、それぞれの国に関して「整理勘定の」結果は非常に異なっており、従ってこの差異「の総体」から引出されるべき帰結が重要である。⁽⁹⁾

と述べ、貿易差額を表 2 の如く概算した。

かくして、イギリス・アメリカの対中国貿易の差額は中国・インド間の差額と差引された。そしてこの差引一千万ドル（七二〇万両、二四〇万ポンドに相当する）に上る中国の輸入超過分が、銀の持出額であるとした。⁽¹⁰⁾ この報告によると、中国貿易における多国間の決済は、いわば多角的におこなわれており、その最終的帰結として、当時中国からインドに銀が支払われていた、ということになる。すなわち、中国からの銀流出は、アヘンのみの対価としてではなく、多国間の個々の貿易関係に存在する銀の流入・流出関係を背景とした中国の貿易全体の差額の決済部分であったと言える。そしてこの送金については、一八四五年の広東に関する貿易報告によると、従来インドへの送金手段として用いられていた馬蹄銀 Sycee に七・九%のプレミアムがついたため、広東市場で流通する打刻銀貨 chopped dollar がこれに代って輸出されるようになった。⁽¹¹⁾ とある。これらの銀の諸形態によるインド・中国間における銀の流出入は、表 3 に示す通りである。

まず中国からの流出額について見れば、一八三三—三四年（東インド会社の対中国貿易独占権の廃止）から急激

銀輸出入 (単位：1,000ルピー, 1,000兩)

				B 輸 出		C 入超額 (A-B)
マドラス	ボンベイ	輸 入 総 額		輸 出 総 額		
総 額 (ルピー)	総 額 (ルピー)	(ルピー)	(兩) (1ルピー =0.326兩)	(ルピー)	(兩)	(兩)
6	3,538	5,904	1,925	34	11	1,914
—	9,078	13,088	4,267	47	15	4,252
7	8,559	12,076	3,937	12	4	3,933
21	9,567	13,103	4,272	46	15	4,257
—	10,074	12,406	4,044	58	19	4,025
4	11,850	17,361	5,660			5,660
—	13,622	21,372	6,967	54	18	6,949
0.3	2,845	4,975	1,622	1,140	372	1,250
4	5,373	9,256	3,017	124	40	2,977
—	5,672	17,380	5,666	2,005	654	5,012
6	15,105	21,644	7,056	1	0.3	7,056
201	28,623	39,501	12,877	1,022	333	12,544
18	17,504	27,364	8,921	1,013	330	8,591
		[金(兩)]	[銀(兩)]	[金(兩)]	[銀(兩)]	(6,000)
		1,308	4,350	—	—	5,708
		1,548	1,560	—	96	3,012
		2,802	6,522	—	—	9,324
		1,902	5,076	—	180	6,798
		2,085	3,450	—	3	5,532
		2,079	4,824	—	9	6,894
		1,704	5,586	30	63	7,197
		774	1,182	6	1,005	945

Imported into each of the Indian Presidencies from China, in the Year 1830 to Dollars from other Bullion.?", 1846.

Exported from the Indian Presidencies to China, in the Years 1830 to 1845,

Circulation during the Nine Years 1848-56, Vol. VI, London, 1857, Appendix

Committee Report, 1847, p. 341)。

表 3 インドの対中国金・

近代中国における貿易金融の一考察
浜下

年	A 輸 入					総 額 (ルピー)
	ペ ン ガ ル					
	金および 砂 金 (ルピー)	銀 (ルピー)			銀 合 計	
馬蹄銀, 棒 銀		ドル 貨	ルピー貨 ほ か			
1832—33	56	2,213	91	0	2,304	2,360
1833—34	67	3,836	100	7	3,943	4,010
1834—35	280	2,899	330	0	3,229	3,509
1835—36	17	3,208	210	79	3,497	3,514
1836—37	9	2,141	181	0	2,322	2,331
1837—38	93	2,411	2,994	9	5,414	5,507
1838—39	36	3,543	4,120	51	7,714	7,750
1839—40	8	403	1,718	2	2,123	2,131
1840—41	21	1,695	2,157	6	3,858	3,879
1841—42	71	10,078	1,476	83	11,637	11,708
1842—43	18	3,770	2,091	654	6,515	6,533
1843—44	137	7,568	2,092	879	10,539	10,676
1844—45						
1845—46						
1846—47						
1847—48						
1848—49						
1849—50						
1850—51						
1851—52						
1852—53						
1853—54						

I) Aの資料: BPP., *East India and China.*, A Return "of the Value of Bullion 1845, respectively, distinguishing, if practicable, the Value in Spanish BPP., *Returns of the Trade*, 1846, Canton, p. 36.

BPP., *Report from the Select Committee*, 1847, p. 353.

II) Bの資料: BPP., *East India and China.*, A Return "of the Value of Bullion respectively."

BPP., *Report from the Select Committee*, 1847, p.353.

III) 1847年以降は, Thomas Tooke, *A History of Prices, and of the State of the* XXIII, table M. に拠った。

ただし()内は概数。

なお, 1ルピー=0.326両, 1ポンド=3両として換算。

補註: アヘン戦争中600万ドル (=432万両) がイギリス本国へ送られた (BPP., *Select*

に増大し、一八三八—三九年が一つのピークをなしている。次いでアヘン戦争後から増大し、一八四四—四五年にピークを形作っている。銀の形態では、馬蹄銀が主体であるが、ドル貨も次第に増加している。アヘン戦後の馬蹄銀の増加は、賠償金に馬蹄銀が指定されたためである。⁽¹²⁾

オルコックの概算によれば、一八四七年の中国の入超額はおよそ二四〇万ポンドであるが、この年のインドへの銀輸送額は、駐広東イギリス領事の推計によると二〇〇万ポンドとなっており、⁽¹³⁾しかも、在インドのイギリス商社に勤務したF. W. プリーダウ Pridaux の証言によると、アヘン戦争の賠償金によって送金は過去二年間増大している⁽¹⁴⁾とされているので、右の二〇〇万ポンド中には、賠償金が含まれていると考えられ、必ずしもオルコックの概算による入超額通りに銀が搬出されてはいないようである。この格差を埋めるものとして、(イ)アメリカからの銀の流入があること、即ちアメリカの対中国貿易において、なお地金による決済がおこなわれており、その結果、中国からの銀流出の絶対量を低くしていること、(ロ)イギリスの東インド中国協会 the East India and China Association の副議長であり、中国から輸入される茶、その他の商品を販売していたS. グレグソン Samuel Gregson の証言に、中国からインドへの送金は為替によって大部分おこなわれている、⁽¹⁵⁾とある如く、為替送金がおこなわれることによつて、現銀が貿易差額通りには中国から流出していないこと、以上の二点が検討されねばならない。このうち、(イ)のアメリカから中国への現銀流入については、表4から、一八四七年は三三〇〇〇ドル(八二五〇ポンド)⁽¹⁶⁾と少額であり、差額を解消するものとはなっていないことが判明する。そこで、(ロ)の為替送金が貿易決済の中心の問題として検討されなければならないが、この問題は、第二節で検討したい。

次に、銀貴の原因に関する第二の認識——銀投機（二一八頁参照）については、以下の事実が挙げられる。即ち、カルカッタの鑄造局で同一重量の外国銀貨より一五%高く評価された紋銀は、一八一五年の広東では、流通価格が鑄造貨幣より七%しか高くなく、私貿易商人がインドへの有利な送金手段としてこれに集中したこと、アヘン戦争中、広東の銀が豊富で減価を示していたとき、六〇〇万ドルにのぼる馬蹄銀がイギリス政府の勘定で広東からイギリスに送られたこと⁽¹⁸⁾、或は、イギリスのベル商会 Bell & Company が、外国において、純度の等しい他の数種の銀貨と等価で購入したカルロスドルを、広東において一四—一五%のプレミアム付きで売り、他方、同じ広東において、六ないし七%減価のメキシコドル、南アメリカのドルを購入して二〇%もの利益を得たこと⁽¹⁹⁾、などである。しかしこれらの結果は、多くの商人が紋銀を求めようになつたことからプレミアムが付き、中国から銀を持出すことが有利ではなくなる、また、広東において銀少⁽²⁰⁾銀貴となると上海から銀が流入する、或は、広東では、馬蹄銀に高いプレミアムが付くと、ドル貨が溶解されて馬蹄銀に鑄直しされる⁽²¹⁾、などの指摘に見られる如く、そのいずれの過程も、投機活動を伴いながらも、平準化の傾向を持っていた。が、いずれにせよ、以上の経過について、一貫して投機によつて銀流出がもたらされたと称することは妥当ではない。なお、この銀投機そのものは、貿易決済手段との関連で、相場の変動に即して検討されねばならないが、ここでは、これら投機活動の結果、平準化傾向が示されることを指摘するに止め、次に為替問題の側面から検討を進めよう。

二、多角的貿易決済機構と為替の役割

為替送金は、先のオルコックの報告との関連で言えば、現銀輸送によらない貿易決済の方法であった。この為替問題につき、駐広東イギリス領事パウリング Bowring は、一八四九年のカリフォルニア金鉱の発見とその後の中国の金輸入増加とが、広東地金市場と国際為替相場とに与えた影響について述べた、ある銀行家の言葉を引用し、毎年イギリス・アメリカによって中国に支払われるべき巨額の「貿易」差引残高は、中国がインドに負う差引残高の大部分によって清算される。なぜなら、前記の諸国がその負っている差引残高を支払うために中国に資金を投下する場合の最も有利な形態は次の三項であるからだ。それは、

- 1、ロンドン宛為替手形の売却。この手形はインドへの送金のために買上げられる。
- 2、ロンドンの東インド会社がベンガル・ボンベイ管区宛に振出した為替手形の購入。これは中国では容易に売却された。

3、中国で販売されるアヘンを購入するための、イギリスからインドへの現銀輸送。
以上の三項である。

1および2の形態における為替手形の相場、即ち、中国で購入可能な手形の相場は、地金や正貨をインドに輸送するより有利なものであったから、アヘンとの交換で「直接」手に入れた地金や正貨は、当然、一般的にはその所有者によって為替手形に投資された。したがって、金や銀が中国から輸出されるのは、外国貿易全体

の総決算の部分に限られていた。⁽²²⁾

と述べ、インドへの地金送金は、為替手形による送金部分を差引いた総決算部分に限られること、アヘンの販売で得た銀は、中国での再投資に有利に活用されることを明らかにし、以下の結論を示している。

- 1、ほとんどすべての外国貿易がイギリスを通じて決済される。
- 2、インドは中国に対する大口債権者である。

3、金と銀とは、共に債権者の要求に応じて輸出されねばならず、そのいずれが輸出されるかは、それぞれの時価に従って選択される。この輸出は、インドに向けて、又はインドに対する中国の負債が直接に振替えられうる他の国に向けて、なされなければならない。そしてイギリスは、中国が通商関係を持つインド以外の国で、インドに対する中国の負債が直接に振替えられうる唯一の国である。⁽²³⁾

かくして、中国貿易の決済は必ずしも銀によらず、インドのアヘンを中国に売って得た銀が為替に投資され、中国からの送金手段として用いられていた。同時に、貿易決済をめぐるこれらの問題の中に、貿易活動を維持再生産すべき投資の問題が不可分に存在していたのである。このように、為替送金は、送金手段の拡張を直接もたらしたのみならず、貿易全体に係わる投資の課題を担うものとして、インド・イギリス間の東インド会社送金ルートを通しておこなわれ、ロンドン金融市場を媒介として、国際的金融網の全体によって支えられていた。

この多角的決済関係は、広東における為替市場から見ると、次のような状況にあった。

広東で売却される為替の主要な宛先は、ロンドン・カルカタ・ボンベイである。マニラ・シンガポール・バ

タヴィア・シドニーなどの取引は非常に少ないのでこれらの地とはほとんど為替取引がないようだ。しかも、ヨーロッパ〔大陸〕とアメリカとは、貿易量が大きいのであるにかかわらず、〔中国との〕為替の直接取引はない。

ヨーロッパへの輸出はロンドン宛為替で決済される。〔ロンドン〕市場に入ってくる、大陸諸都市に宛てた政府および個人振出しの少量の為替の〔ロンドン市場における〕相場は、その為替が大陸諸都市に到着すべき時点でのロンドンにおける該為替の相場を見積ったものと、その為替が〔広東で〕売却された時点において広東に成立していたロンドン宛為替の相場との平均によって決定される。

アメリカへの輸出は、アメリカ工業製品の輸入によって、また、名声ある商社の信用に基いて振出されたロンドン宛〔アメリカ〕手形 bills on London によって、決済されていた。これらの商社は、アメリカ〔商人〕から〔振出された〕為替 drafts from America に対する保証金 cover を、〔先の〕ロンドン宛アメリカ手形について〔現金を〕送金させるか、あるいはアメリカ農産物の委託販売による形で、受け取っていた。

為替の計算においては、一ドルにつき何ペンスとか、百ドルにつき何ルピーとかという、〔ドルを基準とした〕価格の変動が表示されている。

広東宛に振出された為替手形が、アヘンと棉花とを購入するために大量に取引されるのは、カルカタとボンベイとにおいてのみである。⁽²⁹⁾

ここからわかるように、各国貿易とロンドン金融市場とが個別の決済関係を完結的に持っていたのではなく、イギリス—アメリカ、アメリカ—中国、中国—インド、インド—イギリス、イギリス—中国という個別貿易関係が相

互に連結する環の全体かたまりの要として、ロンドン金融市場が位置していた。とりわけ中国貿易に関連して、アメリカ—中国貿易の決済がイギリス—アメリカ貿易の決済に振替えられているところに、即ち、中国からアメリカへ輸出する茶などの商品の支払いを、アメリカ商人が、イギリスへ輸出する農産物（棉花・穀物）によっておこなっているところに、アメリカが中国に対し正貨による決済を必要とせず、為替決済をおこなうる現実的根拠があった。

アメリカ商人がロンドン金融市場宛に振出す為替による米中貿易決済の方法は、一八二〇年代後半に本格的に開始されたものである。一九世紀初頭頃より、東インド会社の金融的能力が後退したにかかわらず、会社はなおアジア貿易を独占していたが、その枠内において私商人の中国へのアヘン持込量が増大し、これの送金手段需要が増大すると、アメリカ為替手形が利用され始め、この送金手段は、アメリカ商人の对中国貿易決済に使用されるのみならず、中国現地のイギリス商人にも利用されることとなった。⁽²⁶⁾ 他方、この決済方法は、インド現地において、パトナーアヘンを独占してきた東インド会社が、私商人によるマルワーアヘンの取扱いによって、アヘンの独占的供給を基礎とするその経済的循環構造の統轄者たる地位から後退し始めたことにも規定され、また、一八三〇年代におけるアメリカの対イギリス棉花輸出ブームによっても促進された。⁽²⁶⁾ かくして一八三〇年代には、中国向けアメリカ船は、イギリス工業製品など取扱額の半分以上をロンドン宛為替（振出先はベアリング商会 *Baring & Co.* が最も多い）⁽²⁷⁾ によって決済していた。しかし、アメリカ人に与えられた信用が巨額に上った反動として一八三六年にイングランド銀行がおこなった、アメリカ手形の受取り拒否、一八三七年にマンチェスターの綿工業とロンドン金融

市場とを中心に発生した恐慌、およびそれに続く金融的逼迫によって、またアヘン戦争に影響された中国における貿易停滞によって、貿易信用関係が断絶し、一八三八—四二年にかけてアヘンの輸送が杜絶したことは、アメリカと中国との貿易関係を大きく衰退させた。⁽²⁹⁾しかし、これらは、五港開放後、一八四五年に回復する。即ち、

アメリカ商人は前年よりも大量に輸入した。彼らは、アメリカへ輸出される茶の支払いの一部を、ロンドン宛為替手形を利用するというより、イギリス市場における工業製品の購入によっておこなっていた。中国の河川における「アメリカ」船舶の数は一八四四年よりも多く、沿岸における商品の運搬のかんりの部分を担当している。また彼らは中国貿易に必要なアヘンを求めて、カルカッタ・ボンベイに自分達の船を送っている。彼らは「ヨーロッパ」大陸との「茶」の取引の大部分を掌握することに成功した。このことが、金銭を利用しうる否とにかかわらず、それ自体として、彼らが、受取った委託販売品「の販売代価」の送金に当って、為替手形を「広東」市場で売り出す——この方法はしばしば不便であり、とりわけ現在ののような危機の時期には不便である——代りに、彼ら自身のロンドン宛為替を組むことをある程度容易にした。⁽³⁰⁾

という。ここから、アメリカが茶の購入資金としてイギリス工業製品を中国に持ち込んでいる事実、またヨーロッパ大陸との茶貿易を担当することにより、輸出業者としての機能を果し、中国市場で為替が買い上げられなくとも、ロンドン金融市場を介して決済をおこなっている事実、を窺い知ることができる。貿易活動の量的拡張に止まらず、それが決済手段の拡大によって裏打ちされているのである。ただし、イギリス工業製品の中国への輸入を決済手段として利用する方法は、一八四九年段階にいたると、広東市場において、次のような状況になる。即ち、

十月、アメリカ商人勘定の為替が多く申込まれたため、その月の為替相場は「一ドル当り」4 s. 3 d. となった。そしてアメリカへの輸送が重要性を加えた年末の二カ月間に振出人が増加したので、為替相場もこれに比例し、年末には遂に4 s. 6 d. となった。この相場は、全くアメリカ商人の振出人が多かったことによる。彼らは、このシーズンにアメリカへ船積みしたかなりの量「の茶などの商品」に対する支払資金を確保せねばならなかった。前のシーズンには、彼らは大量のイギリス製品を「中国に」輸入し、それらを中国において資金源とした。しかし、イギリスの工業地帯の製品や綿糸の価格が一八四九年の下半期に急騰したため、彼らは先の方法をくり返すことができなかった。そこでいつもの方法——イギリスの銀行業者が彼らに与える信用に基いてイギリス宛の為替手形を振出す——に頼った。⁽³¹⁾

とある如く、イギリス工業製品の中国への輸入は、必ずしも有利な決済手段たりえなくなっており、決済の基本はアメリカーイギリス間の棉花貿易を媒体とする為替決済という、イギリス本国商人には「回りくどい」と見える方法であった。アメリカ為替手形の使用をめぐる、アヘン戦争後のこの新しい関係は、当然のことながら、对中国貿易に首位を占めるイギリスの貿易活動のなかで、イギリス商人がアメリカ商人の振出す為替を購入することによって成立っていた。即ち、ロンドン金融市場を介して、イギリス産業資本は、自らが必要とするアメリカ棉花に対する支払いの一部を、アメリカの对中国貿易における中国茶輸入のためのアメリカの為替を購入することによって決済するという、イギリス・アメリカ・中国の三国間関係の形成である。⁽³²⁾そして、「イギリスのペアリング商会その他宛にアメリカ商人が振出した為替を購入するため、「イギリス商人は」アヘン「売上金」を含む余剰資金をアメ

リカ商人に手渡す」という、中国現地のイギリス貿易商社ギブ⁽³⁴⁾ T. A. Gibb の証言に見る如く、当時、イギリス商人が主に広東において手に入れたアメリカ為替の購入資金は、アヘンの売込みによって得られていた。イギリス商人は、アヘンの売上げ金の本国への送金手段として、また投資手段として、このアメリカ為替を利用していたのであり、イギリス・インド・中国のいわゆる三角貿易は、アヘンを介して、前述のイギリス・アメリカ・中国の三角貿易関係と連結していた。そして、この多角的関係は、ロンドン金融市場を中心とする国際的金融・信用網によって支えられ、それによって、中国におけるイギリスの私貿易商人以来の商人 *China Hands* と本国産業資本家とは共存関係を保ちえたのである。

以上に見たアメリカ為替手形使用の歴史的過程は、イギリス綿工業を中心に編成された、原料供給地としてのアメリカと製品輸出先としてのアジアという商品流通の成立を基盤としており、その貿易金融にあつては、アメリカとアジアとが、ロンドン金融市場を中心とする一つの連環構造の中に組み込まれたことを示している。これは、中国貿易金融の直接の担い手の如何にかかわらず、国際金融資本が、ロンドン金融市場の動向に規定されつつ、アジアに金融的進出をおこなうという客観的条件を獲得したことに他ならない。即ち、たとえ当時、中国現地の貿易にたずさわることによって、現地のイギリス商社が中国貿易金融の大部分を握っていたとしても、その背景に、多角的な国際的金融網が、イギリス綿工業の存在を基盤としたロンドン金融市場を中心に編成されていたという事実が、一方では、彼ら中国現地商社をしてそれへの対応を余儀なくせしめ、他方では、本国金融資本の進出を可能にさせる条件を形作っていたのである。そしてこのことは、一八六〇年代以降、中国金融市場を實際に掌握していくヘゲ

表 4 アメリカの対中国貿易 (単位: 1,000ドル)

年	輸 出			輸 入	銀, 銀貨		入 超 額
	本 国 品	外 国 品	計		輸出	輸入	
1842			1,444	4,935			3,491
43			2,419	4,386			1,967
44			1,757	4,931			3,174
45	2,079	197	2,276	7,286	159	27	4,878
46	1,178	154	1,332	6,594	113		5,149
47	1,709	124	1,833	5,583	33		3,717
48	2,064	126	2,190	8,083	72		5,821
49	1,461	122	1,583	5,514	10		3,921
50	1,486	119	1,605	6,593	25		4,963
51	2,156	329	2,485	7,065	147		4,433
52	2,480	183	2,663	10,594	20		7,911
53	3,213	524	3,737	10,574	489		6,348
54	1,294	104	1,398	10,506	156	108	9,060
55	1,533	186	1,719	11,049	675		8,655
56	2,048	510	2,558	10,454	634	1	7,263

資料: BPP., *Select Committee Report*, 1847, p. 356. The U. S. Bureau of Statistic (Treasury Department), *Commerce of Asia and Oceania*, 1898 (卿汝楫『美国侵華史』北京, 1962年, 第一巻, 93-94頁より再引用)

モニーを、イギリスを中心とした国際的金融資本が握り、その銀行が中国に進出するという、歴史的的方向性を予測せしむるに充分である。アメリカが替の使用は、貿易事務上の単なる権宜として登場したのではなく、中国貿易金融と、さらに中国金融市場とに対し、以上の如く、より规定的な構造的な作用をもつ歴史的事態の出現であったと考えられる。

ここで、アメリカが替手形が使用された歴史過程に対応してそれを規定した、アメリカの対中国貿易について簡単にふれておきたい。アメリカの対中国貿易の特徴の一つは、快速船が大量かつ広範囲に輸送を担当したことにある。一八四五年にニューヨークで建造されたレインボー Rainbow 号(四五〇噸)を以て嚆矢とする本格的な快速船は、従来一七

表 5 広東港に入港した外国商船の
国別噸数 (単位: 1,000噸)

年	イギリス	アメリカ	その他	計
1844	111	23	7	142
45	86	39	12	137
46	93	30	8	131
47	89	28	9	126
48	72	31	7	110
49	93	37	12	142
50	75	41	18	134
51	104	49	24	177
52	124	60	26	210
53	85	48	27	160
54	69	46	40	155
55	71	65	44	180

資料: BPP., *Report by Mr. Parkes, British Consul at Canton, on the Trade of that Port during the year 1856*, p. 30.

(イギリスの貿易量については、表9・10を参照) ことも、中国の対外貿易に占めるアメリカの貿易活動の比重の大きさを示しているといえよう。⁽³⁶⁾ この活動を保証したものは、アメリカ商人が、アメリカ政府の関税優遇策によって、イギリス商人より高値で中国茶を購入しようという、競争上有利な条件下にあったこと、⁽³⁷⁾ また、本国から棉花或は綿糸を持ち込むことによりインドー中国貿易に介入したことなど、⁽³⁸⁾ 輸送力を持つのみならず、通商に対する政策的保護と自国の農業・工業生産とを背景として、従来の貿易構造そのものを変化せしめつつあった、⁽³⁹⁾ という事実である。さらにまた、中国市場において、アメリカ商社が、中国商人の代理店となり、共同出資者となり、取引上有

五日を要した太平洋横断を約八〇日に短縮した。帆船時代から蒸汽船時代への移行期として、海運通商史上、快速船時代と称せられる一八四〇年代初頭から六〇年代初頭に至るこの時期には、快速船が茶・アヘン運搬を担った。⁽³⁶⁾ この時期におけるアメリカの対中国貿易を、表4および表5に示す。アメリカの対中国貿易の特徴は、アメリカ側の著しい入超であり、その決済は一部が銀でおこなわれている他、大部分が為替によっておこなわれたと考えられる。そして、アメリカ船の航運活動の範囲がイギリスとアメリカとの貿易量の比に照して大である

利な地位を築くべく行動していたことも見逃せない。

以上に明らかにしてきた如く、アヘン戦争前後の、銀流出—銀貴の問題は、単に歴年の流出の絶対額の多寡にあるのではなく、一、流出と流入との連関の中においてその差額部分のみが流出として決済されるという貿易決済構造が形成されたところに、そして、二、為替手形による送金手段が利用されることによって、中国市場がロンドンを中心とする国際的金融市場の一環に組みこまれたところに、その歴史的意義があった。では一体、この一および二の相関として、^{ブリオン}地金（以下、金・銀を併せてブリオン一般を「地金」と記す）と為替とは如何なる関係にあったのであろうか。いま、一八四九年の広東における金価格の変動について述べた記録から、両者の関連を具体的にみると次の通りである。

広東の金価格は、1、広東における銀価との比価によって、2、インドとイギリスにおける金・銀の価格によって、3、中国—インド間の為替相場によって、4、中国—ロンドン間の、そして同時にインド—ロンドン間の為替相場によって、決定される。金価およびそのいくつかの変動要因は、相互調整におもむく必然的傾向を持つている。また金価の変動〔幅〕は、他〔のいずれか〕と交換されるときに、交換される相手の変動〔幅〕を越えていることはほとんどなく、〔金建てをも含む為替および^{ブリオン}銀は〕大体同時に変動する。金の予想産出高と、〔これと関連する〕直接インド宛為替の相場の推移との間に大した食い違いが起こらなくなった結果、〔金の〕輸出は次第に一年を通じておこなわれるようになって、為替が少なく〔その相場が〕高いときに〔金の〕輸出は最大となり、為替が多く〔その相場が〕安いときに最小となる。〔金の〕輸出は、通常の年にはほと

んどすべてインドへ向けられるが、何らかの原因でインドーロンドン間の為替相場が次のような限度まで立ち至ったとき、金はインドではなくロンドンに輸出される。即ち、ロンドン宛中国為替が、広東からロンドンへ送金される金の価格よりも安く広東において購入でき、しかもその購入価格で「為替を」インドにおいて売却できるという価格の限度に、インドーロンドン間の為替相場が立ち至ったときである。と同時に、それは、為替相場が、金を広東からインドへ送る場合よりも、より利潤があるという限度にまで立ち至ったときである。そして、その金に対して広東でロンドン宛に振出された為替手形が、インドへの送金のために広東で売られることよつて、インドの中国に対する債権を清算するために、中国のロンドンに対する債権はインドに振替られるのである。⁽⁴⁰⁾

ここに示される如く、中国の対外国貿易の最終的決済は中国ーインド間でおこなわれるが、この決済の送金は、中国からインドへ、という方向を絶えずとるのではなく、インド、ロンドン、広東のそれぞれにおける地金相場^{ブリオン}・為替相場の高低によつて、送金先および送金手段が決定された。即ち、広東の為替相場が同地の地金相場^{ブリオン}・高いときにはインドへの地金送金を以て、また、広東のロンドン宛為替が同地の地金相場^{ブリオン}に比して安く、かつインドの為替^{ブリオン}・地金相場の如何によつては、ロンドンへの地金送金を以て、インドに対する負債が決済された。このように、地金^{ブリオン}・正貨による送金と為替送金とのいずれが選択されるかの基準は、両者の相場の高低にあったが、両者は、それぞれの流通の絶対量のみを基いて独自に変動するのではなく、相互に规定的な関連を持っていた。

しかしながら、一八四〇年代の後半期には、右に見た、為替と地金^{ブリオン}との相互関係をあくまで前提としながらも、

そこに、いくつかの変化が現われ、両者の相互関係を動揺させている。そこでまず、この時期の広東における為替相場・銀相場、および、上海における為替相場の変動を見てみると、それぞれ表6、表7の如くなる。これより、広東・上海両市場において示されている相場変動の特徴とその諸要因とは、次の四点にまとめることができる。

1、ロンドン宛六カ月後一覽払の為替は、十二月末から三月にかけて高く、四月から六月にかけて下落し、七月から九月にかけて低水準が維持され、十月から十二月にかけて上昇する、という傾向を示している。一年間をおよそ四分して、昂騰—下落—低水準—上昇という季節周期を持っており、これは茶積出による為替需要の増減に対応している。

2、一八四七年まで、各年の平均為替相場は上昇傾向を示している（この傾向は上海において、五〇年代半ばまで一層顕著である）。

3、馬蹄銀の市場価格には次第に高いプレミアムが付くに至っており、銀不足を反映している。ただし、四九年末におけるプレミアムの減少は、上海から銀が流入したことによる。⁽⁴¹⁾

4、為替相場の右のような基本的傾向の中で、四八年の下落と、四九年末の上昇とが注意されねばならない。前者は、イギリスにおける四七年恐慌が、中国において、それ以前からの過剰貿易の矛盾を露呈させたものである。即ち、従来、中国商人が貿易勘定を持つ茶貿易は為替相場を押し上げる傾向にあったが、綿製品および茶の貿易量が共に減少したことによって、為替相場が下落した。⁽⁴²⁾ また、四九年末期の昂騰は、アメリカ商人が本国への茶輸出のため大量の為替を申込んだことによる。⁽⁴³⁾

表 6 広東における為替・銀相場

年	月	ロンドン宛6カ月為替 (註)	カルカッタ宛為替	馬蹄銀 (プレミアム)
1845	1-3月	4s. 4 d. ~ 4s. 6 d.	223~226ルピー (100スペインドルにつ き) <年平均224 $\frac{1}{2}$ ルピー>	3~5%
	4-6	4s. 3 d. ~ 4s. 4 d.		
	7-9	4s. 2 d. ~ 4s. 3 d.		5~6%
	10-12	4s. 4 $\frac{1}{2}$ d. ~ 4s. 5 $\frac{1}{2}$ d.		
1846	1-3	4s. 5 $\frac{1}{2}$ d. ~ 4s. 6 d.	212~218ルピー <年平均217ルピー>	7~9%
	4-6	4s. 3 d. ~ 4s. 3 $\frac{1}{2}$ d.		
	7-9	4s. 4 d.		
	10-12	4s. 4 d. ~ 4s. 5 d.		
1847	1-3	4s. 5 d. ~ 4s. 5 $\frac{1}{2}$ d.	212~217ルピー <年平均214 $\frac{1}{2}$ ルピー>	8~10%
	4-6	4s. 4 d. ~ 4s. 4 $\frac{1}{2}$ d.		
	7-9	4s. 4 $\frac{1}{2}$ d. ~ 4s. 5 d.		
	10-12	4s. 4 d. ~ 4s. 5 d.		
1848	1-3	4s. 5 d. ~ 4s. 6 d.	前年より安い	9~10%
	4-6	4s. ~ 4s. 0 $\frac{1}{4}$ d.		
	7-9	3s. 11 $\frac{1}{2}$ d. ~ 4s. 2 d.		7~8%
	10-12	4s. ~ 4s. 2 $\frac{1}{2}$ d.		
1849	1-3	4s. 2 d.	212~216ルピー	7~8 $\frac{1}{2}$ %
	4-6	4s. ~ 4s. 1 d.		
	7-9	4s. 2 d.	219~225ルピー	8 $\frac{1}{2}$ % ~ 9 $\frac{1}{2}$ %
	10-12	4s. 3 d. ~ 4s. 6 d.		4 $\frac{1}{2}$ % ~ 8 $\frac{1}{2}$ %

(註) ロンドン宛6カ月後一覽払の為替1ドル当りの価格。

資料: BPP., *Returns of the Trade of the various Ports of China, 1846; 1847; 1848; 1849; 1850, Canton.*

表 7 上海における為替相場 (1ドル当りの年平均)

1843-44	4s. 0d.	1849	4s. 6d.	1854	6s. 3d.
1845	4s. 0d.	1850	5s. 0d.	1855	6s. 5d.
1846	4s. 2d.	1851	5s. 0d.	1856	7s. 0d.
1847	4s. 2d.	1852	5s. 0d.		
1848	4s. 4d.	1853	6s. 6d.		

資料: BPP., *Report by Mr. Robertson, Her Majesty's Consul at Shanghai on the Trade of that Port during the year 1856, p. 46.*

右の1・2に指摘した如く、為替・銀^{アメリカン}相場の変動が、貿易状況を反映していることは言うまでもない。しかしこの時期に、それが単に貿易量の増減の反映として現象しているのみではなく、3・4にみられる如く、銀不足および過剰貿易によっても、為替・銀相場の変動がもたらされているところに、両者の従来の相互関係に基本的な変化が生じていることを見ることが出来る。中国における銀不足の問題については、一八三〇年代後半のアヘン輸入の激増による銀流出、アヘン戦争時におけるイギリス本国ならびにインドへの銀搬出、アヘン戦争後の戦争「賠償金」によるインドへの銀流出(表3参照)などによって、アヘン戦争までは銀が豊富であったものが、一八四五年以降は上海においても少なくなつたのである。⁽⁴⁴⁾この絶対量の減少は、中国への輸入品の増加に比例して関税支払いのための馬蹄銀を購入しなければならぬという外国商人側の銀需要の増加によつても、一層逼迫の度を加えた。そして、この銀少銀貴は、貿易における送金手段のあり方に影響を与えた。アリマセンが、

現在のように銀価が高い時には、銀は中国に留まる。アヘン商人はインド宛あるいはイギリス宛の手形を購入して、アヘン代金をインドに送金する。これらの手形は銀によるよりも有利に交換される。⁽⁴⁶⁾

と述べる如く、従来、貿易差額を中国側の入超に変ぜしめ、その結果、銀を主たる決済手段・送金手段としてインドへ輸入していたアヘン貿易においても、その送金方法は、為替送金へと変化し、後述するように、為替によつて茶を買付けることが中国市場で困難であるという事態を介した——するに至っている。

次に、過剰貿易によつて変化した貿易決済方法の内容は、現物取引⇔barter, barter tradeという言葉に最も特徴的に表わされている。この現物取引は、一方では中国における銀不足によつて、他方では中国をめぐる国

實際的貿易構造の変化によって惹き起こされたものである。そうであるが故に、この問題を検討することが、当時の中国貿易市場が持つ時代的性格を明らかにする要諦であると思われる。ただし、当時のこの「現物取引」問題の具體的検討に入る前に、本稿における行論との係わりで、いわゆる現物取引の基本的性格を確認しておきたい。

中国の貿易決済方法は、現銀決済から為替決済へという方向において、その歴史的展開を示してきた。このことは即ち、中国が国際的金融網の一環に組み込まれていく歴史過程を表わすものに他ならなかった。しかし、一八四〇年代後半に「現物取引」、「現物決済」という、一見従来の歴史過程に逆行するが如き決済方法が登場した。即ち、為替による単一の決済方法とは異なって、当時の人々（イギリス産業資本家ならびに中国現地イギリス商人）が中国貿易について「現物取引」と表現しているのである。現物取引と言えば、通常、次のようなものがある。即ち、貨幣経済以前の物々交換、経済学的範疇におけるプリミティブな交換としてのそれである。しかし一八四〇年代後半の当時に言われていたものは、この単純な形態には止まらないものようである。ただし、貿易決済というものが、借方から貸方に、為替手形の形においてであれ、差額を最終的に決済するものであるとすれば、この差額にいたるまでの等価の部分は現物交換として觀念されうるでもあろう。しかし、このことは為替手形による決済に必ず伴うものであるから、当時とくに更めて言われた「現物取引」なるものは、そのような一般的な問題を意味しているはずはない。したがって、この「現物取引」は、プリミティブな物々交換の性格の如きものを何らかの形で内に含みつつ、しかも、きわめて特殊なものとして性格付けられた現物取引である——敢えて言えば、すでに為替手形による決済も可能となっている国際経済的環境の下にありながら、特殊的に実現したところの物々交換であ

った、と言えよう。この特殊な事態が何故出てくるかを明らかにすることによって、当時の、中国をめぐる貿易構造とそれが持つ時代的性格とが浮び上ってくるであろう。この新たな貿易構造の登場は、イギリス議会においても特に注目せられ、現地当事者の証言が求められた。以下、これの分析を通じて考察をすすめたい。

三、貿易構造の変化と△現物取引▽

一八四七年三月、イギリス議会上に、中国貿易に関する特別委員会 the Select Committee on Commercial Relations with China が設置され、同年七月にかけて、一六回に亘り開催された。委員会の構成は、インドおよび中国との貿易に携わるジャーディン・マセソン商会の創設者の一人ジェームズ・マセソン James Matheson、ロンドン金融界に中心的地位を占め、アメリカ・アジアなどに国際的な金融網を持つペアリング商会のフランシス・リアリング Francis Baring、および、对中国貿易・外交関係を打開すべく、アヘン戦争以前にイギリス政府から中国に派遣されたことのあるジョージ・ストーントン Sir George Staunton など、商業・金融・外交という、对中国関係を構成する基本分野の利益代表を含む一五〜一六名より成っていた。⁽⁴⁷⁾

特別委員会は証人喚問の後に、次の如き中国貿易に関する基本見解を表わしている。

「一八四一—四六年の」貿易取引で、中国に輸出された工業製品、およびそれに対する支払いとして「イギリス」本国に送られた茶の雙方の大部分について「イギリスが」被った損失は、公正にみて三五%から四〇%になると言えるだろう。損失が余りにも大きいため、製造業者のうちには貿易を全く放棄したものもあり、イギ

リスへ最近送られてくる茶の大部分も中国商人の責任勘定となり、イギリス商人は「これを自己勘定でおこなうという」冒険をしようとはしない。

我々には、貿易の困難の原因は、中国においてイギリス工業製品に対する需要が不足していることや、他国との競争が激化したことなどにあるのではないことがわかった。「中国において」全般的需要のある商品について、外国との競争が非常に懸念されるという証言はない。唯一の困難は「中国への輸出品に対して、現状では何ら利益をもたらさぬ茶以外に」見返りを調達できないことにある。⁽⁴⁸⁾

このように、一八四三年から四七年までのイギリスの対中国貿易を総括して、茶に替わる見返り品を如何に調達するかという問題を特別委員会がとりあげた背景には、当時、右のような一時的な極限状況としての「中国商人の責任勘定」をまでもたらした中国貿易が、 Δ 現物取引 ∇ によっておこなわれていたという事実があった。

先に示した現物取引の基本的概念を確認したうえで、この時期のイギリスと中国との Δ 貿易取引 ∇ について、イギリス産業資本家が言う Δ 現物取引 ∇ とは如何なる方法でおこなわれていたのかにつき、特別委員会において証人の証言するところを聞こう。

まず、リヴァプールの東インド \equiv 中国協会——イギリス綿工業の対アジア貿易の利害を代表する——の議長ウィリアムニコル William Nicol は次のように証言している（以下、第三三七—三五三号）。

第三三七号。⁽⁴⁹⁾「……製造業者と「商人との間に」論争が起った。彼（製造業者）は「製品の販売を」リヴァプールにある中国貿易に従事する商社に委託している。この商社は見返りに、主として茶を受取っている。…

：私は仲裁者として事態を詳しく調査した。ここにその結論を簡潔に述べよう。第一回目の取引は一〇ペイルのトゥイスト twist と一〇ペイルのシャーティング shirting とであり、総経費は八八六ポンド一九シリング八ペンスとなり、それが送状 invoice の価格であった。製造業者は価格を自身で決定している。しかし我々は、商品〔輸出〕に対して〔製造業者が貿易業者に〕前貸しをおこなっていたため、送状価格に〔製造業者の〕手加えられていた tested ことを知った。」

第三三八号。モファット氏 Mr. Moffatt 「どれ位〔前貸ししている〕か？」——「三分の二である。」

第三三九号。議長 Viscount Sandon 「それは適正な送状か？」——「適正な送状だ。これらの商品を中国で販売し、一ドルを四シリング四ペンスとして換算すると、七一七ポンド四シリング九ペンスとなった。従って中国での販売はイギリス貨幣で一七〇ポンドの損失である。もし見返りが為替で送られたとしたら、さらに一二～一五％程度の減額が生じたに違いない。それは為替と茶との価格差がその程度あるからだ。彼ら（貿易業者）は、なしうる最善の方法で中国商品に投資してよいという権限を製造業者から与えられていた。貿易業者は上海でドル貨を獲得できなかったから、見返りとして、すべて茶に投資した。その茶はイギリスにおいて四七〇ポンド一五シリング四ペンスで売れ、ここから中国への委託販売の結果生じた損失分を差引くと四一六ポンド四シリング四ペンスとなった。……損失は多額であるが、これは例外的なことではない。」

第三四〇号。ベケット氏 Mr. Beckett 「いつのことか？」——「送状の日付は一八四四年一月五日、中国で商品が販売された日は一八四五年六月である。⁽⁶¹⁾茶は同月に購入され、リヴァプールに送られた。」（中略）

第三四五号。パウリング博士 Dr. Powling「この場合は完全な現物取引か。それとも、商品が現金で売られ、その現金が茶の購入に使われるのか？」——「これは完全な現物取引の場合である。購入が販売と非常に密着しているから、私が確信するところ、茶は「イギリス」商品で支払われるべく購入される。……」（中略）

第三四九号。議長「両者（イギリス商人と中国商人と）の間に現金の問題は起らないか？」——「合計は金額で表示されるに違いないと思うが、それは、商品によって支払いをおこなうためになされるだろう。」

第三五〇号。「どのようにして取引がおこなわれるか？」——「茶で「支払われるものとして」ある一定額が決定されると思う。」

第三五一号。ブラウン氏 Mr. Brown「このようにおこなわれるのではないのか。まずイギリス商品の価格が何両と決定される。そして「イギリス」貿易商人が、交換として、同じ価額だけの茶を受取ること同意する。これでよいか？」——「そうだ。〔ただし〕我々になされた説明によると、上海の「イギリス」商社は、イギリス商品の額をはるかに上回る量の茶を上げる。そのときも、支払いは現金ではなく〔後日さらにイギリス〕商品で支払う約束がなされるが、特定の価格は言わず、後の相談事項へと回される……。』（中略）

第三五三号。パウリング博士「あなた方は、その「受取った」価額で為替手形を獲得しようと考えないのか？」——「考えない。為替手形の相場は極端に高いから、その為替手形が自ら振出したものである場合以外に、手に入れることはできない……。」⁽⁸²⁾

また、リヴァプールの商人ローソン Christopher Rawsonは、証言に際して表8の如き貿易取引の明細を提出し

表 8 上海における Flora 号の取引の詳細 (一部は Sarah Louisa 号)

1844年10月	61ケースの白木棉 3,042反			
	123 梱の粗布 6,500反			
	9,542反	売上	26,311ドル	32
			£.	s. d.
	1845年11月の上海為替相場 1ドル4s.6d. …	5,920	—	6
	原価 ……	5,938	10	6
	損失 ……	18	10	—
〔返送 (綿製品の対価の本国送付。以下同様)〕				
為替 ……	619ドル 64, 1ドル 4s.6d. ……	139	8	5
茶 ……	25,691ドル 58, 1846年10月産出 ……	4,539	19	—
	26,311ドル 22, 1ドル4s.6d. で5,920 £.—6d. ……	4,679	7	5
	損失 (売上と返送との差額) ……	1,240	13	1
	原 価 ……	5,938	10	6
	売上と返送との損失合計 ……	1,259	3	1
		4,679	7	5
	売上における損失 ……	0. $\frac{9}{32}$ %	18	10 —
	原価			
	返送における損失 ……	20 $\frac{13}{16}$ %	1,240	13 1
	売上			
	売上と返送との損失合計 ……	21 $\frac{3}{32}$ %		

保険, 年5%の利子などすべての費用を含む

資料: BPP., *Report from the Select Committee on Commercial Relations with China*, 1847, p. 151.

た。この収支明細表は、一、綿製品の売上げについて、本国への送金手段は圧倒的部分が現物の茶であり、僅か二%程度が為替であること、二、綿製品の販売それ自体では損失は少額であるが、この綿製品の対価物として(53)現物取引により入手した茶の販売における損失が綿製品売上げ高の約二〇%と大であること、を示している。

右の二人の証言は、イギリス綿製品の中国への輸出量を拡大せんとするイギリス綿工業と密接な利害関係を持った立場から見た、従って綿製品のみ取引

収支という限定された枠から見た、 Δ 現物取引の具体的報告である。ここから、綿製品と茶との間に Δ 現物取引 ∇ がおこなわれている事実、また、中国において、個別 Δ 現物取引 ∇ における茶の超過買付け分が将来再びイギリス商品によって支払われるという契約を含む長期の取引関係のなかで、両者がほぼ等価に交換されているが、見返りとして得た茶がイギリス本国で販売された結果は、綿製品の生産・販売の総経費に遙かに及ばず、綿布製造業者に損失を与えている事実、さらに、他の送金手段としての為替手形は、相場が高いため利用が制約されている事実などが知られる。とくに中国の生産物による以外の送金手段については、ストラウド(イングランド)の毛織物製造業者 W = エウオート W. Ewart の証言に拠ると、ドルによる送金は本国製造業者に利益を与えたが、しかしそれが可能であったのは一八四四年の一年のみである。⁽⁵⁴⁾ その後の Δ 現物取引 ∇ による損失の結果、本国製造業者や輸出業者は、中国の代理店に対し、入手できる為替ならば何でもよいから、生産物によってではなく送金してくれるよう要求したが、⁽⁵⁵⁾ しかし為替手形の相場は高く、手形を獲得するために支払われるプレミアム部分が、総計からさらに差引かれ、損失部分を拡大した。⁽⁵⁶⁾ そして、この為替相場は、先に見た如くアメリカ商人の為替需要によって次第に高くなる傾向を持っていたから、本国産業資本家の要求にも拘らず、現物以外の送金手段は制約されていた。このような状況下で、先の二人の証言の帰結は次の如きものとなる。即ち、 Δ 現物取引 ∇ をいわば既定の事実として前提して、綿製品の販売面にあつては損失が少ない、ないしは利益が上っているが、しかるに、茶の販売面において大きな損失を被っているという、数字に表われたこの二つの事実を踏まえつつ、なかならず綿製品の販売を増大させるために、超過買付けによる飽和状況が常態にさえなっている茶に対するイギリス市場の購買力を一層増

大きせようとはかり、従つて、本国において茶税の軽減がおこなわれなければならない、と主張することである。⁽⁵⁷⁾これが、イギリス産業資本家にとって、△現物取引▽に対応した、中国におけるイギリス綿製品市場の拡大のための対策であつた。⁽⁵⁸⁾

しかし、ここでは、△現物取引▽問題が全体としてどのように認識されていたかについては明らかにされていない。即ち、△現物取引▽の原因およびそこに至る経過はどうであつたか、さらには、イギリス綿製品についてのみ△現物取引▽なのか、或は、この時期の中国開港場における取引全体の基本的形態としてのそれであるのか、総じて、中国をめぐる貿易関係の時代的特徴とそこにおける綿製品の位置とについては明確ではない。また、△現物取引▽の現実の問題として、それに不可避的に伴う価格算定の基礎には、対価物である茶の販売について予測される損失部分が、取引時の綿製品価格にあらかじめ逆算的に加算されているはずであるに拘らず、さきの兩人は、取引の結果としての手取り額における損失を言うのみで、そのような結果にいたる個々の手続に言及してはいない。そこで次に、中国貿易の個々の取引について利害を持つ、中国現地のイギリス商人の証言を聞くことにしたい。

ジャーディン・マセソン商会の A. リマセン Alexander Matheson——一八二六年から二一年間、中国沿海において主としてアヘン貿易に従事——は、次の証言をおこなつた(以下、第四五二六—四五四七号)。

第四五二六号。スプナー氏 Mr. Spooner 「イギリス商人は自分達の商品の見返りとして馬蹄銀 Sycee silver を手に入れるのか?」——「工業製品の場合にはほとんどない。我々は、一ドルにつき 4 s. 3 d. より良
い(＝安い)相場で為替手形を入手できないときには、イギリスに「馬蹄銀その他の」銀で送金した。」

第四五二七号。「それならば、実際に、銀が商品に対して支払われたのか？ なぜなら、それらの商品に対し支払うために、あなたはその銀で為替を振出したのだから。」——「そういう場合もあるかもしれない。しかし私が述べたのは違う場合についてである。即ち、我々はアヘンの代価として、ボンベイの商人のために銀を本国に送り、彼らは「イギリス商品の代価として」ボンベイからイギリス宛に為替手形を振出す。」

第四五二八号。「本委員会は、中国貿易について、輸出されるイギリス工業製品の見返りを確保することが極めて困難である、という多くの証言を得た。あなたの言う、中国に馬蹄銀が豊富であった時期に、なぜ銀を見返りに得ることが困難であったのか。」——「当時、銀はドル貨で購入され、商人が望むならば「イギリス」本国に送られたかもしれない。ただ、私には送られた額はわからない。」

第四五二九号。「なぜそのような取引がおこなわれなかったのか？」——「次のような事情からである。イギリスから送り出されるすべての商品は、「中国の」産物、主として茶と現物取引される。中国へは「現金で売り捌くことが困難なほど」非常に大量の商品が送られたから、中国商人は、彼らがいかにほども供給できる茶と交換にイギリス商品を獲得できる限りは、現金を^{マキ}支払おうとはしない。」

第四五三〇号。「委員会に示された証言によると、イギリスから中国に輸出される商品の利益分は、茶の輸入によって生ずる損失分に完全に呑み込まれてしまうという。本国に利益をもたらすことができる馬蹄銀のような物品がありながら、なぜ「イギリス」商人達は本国で損失を生ずる茶を輸入するのか？」——「数年前、中国にある「イギリス商社の」代理店が、茶に対する「本国の」課税が軽減されることを期待して大量の茶を本

国に送り、その見通しの下で投機をおこなったからである。そうでなければ送られなかっただろう。」(中略)
第四五六号。モファット氏「あなたは、イギリス商人がおこなうアヘン貿易が、中国貿易を全般的に拡張したと思うか?」——「私はそう確信している。イギリス工業製品が「中国の」東海岸に進出したときには、僅かしか売れなかった。もし綿製品を積んだ船がアヘンを携えていかなかったならば、その船は経費を取戻すことができなかっただろう。」

第四五七号。「それならば、アヘンは現在おこなわれている広汎な貿易の先駆者と言えるか?」——「その通りだ。もしアヘン貿易が存在しなかったならば、我々には現在の綿製品貿易が全くなかっただろうと思う。」

「その場合我々は」綿製品貿易を続けていく費用に耐えられないだろう。」⁽⁶⁰⁾

また、ベル商会 Bell & Company の A=ウィルキンソン Alfred Wilkinson——一八三五年以来、広東代理店を經營し、五港開放後、寧波以外の各港を歴訪——は、次のように述べている(以下、第一三〇五—一三〇八号)。

第一三〇五号。スミス氏 Mr. J. A. Smith「もしイギリスで茶の需要が増大したならば、あなたは、そのことが綿製品の販売を増大させるとは考えないか?」——「商品の販売が別の商品の購入に大きく影響するとは思わない。」

第一三〇六号。「現物取引の場合でもそうか?」——「私は現物取引について、中国問題を話し合った多くの人々が考えているようにには理解していない。」⁽⁶¹⁾

第二三〇七号。議長「あなたは現物取引についてどのように理解しているのか?」——「中国において最近お

こなわれている現物取引は、特定商品（綿製品）の過剰供給が原因で惹き起こされたものである。仲間の「イギリス」商人が商品による受取りを承認しようというときに、一人だけが現金による販売を試みることは、非常な低価格で販売する以外に、無駄である。」

第一三〇八号。パウリング博士「本国あるいは中国において「商品販売の」便宜が増大したら、そのことは「他方の」需要増大につながるか？」——「確かにつながる。あなた方が中国人から購入できる産物の額が大となれば、そして、もし「中国への輸出品が」彼らの需要に適すれば、それだけ中国人はあなた方から多く購入するだろう。しかし、どのようにしたら、あなた方が特定の「商品」を「相手側の」商品の——例えば「アヘンではなく」綿製品を茶の——対価物とすることができるようになるのか、私には想像できない。」

以上に見た如く、中国現地における貿易活動に利害関係を持つ右の兩人にとっては、元来、茶とアヘンとが主要な貿易品であり、綿製品はそのなかに割り込んだ貿易品であった。即ち、中国に輸入される綿製品は、彼らの従来からの貿易活動に対する、いわば一方的闖入者であった。そして△現物取引▽の原因は、この綿製品の過剰貿易にあると指摘されている。AⅡマセソンおよびAⅡウィルキンソンの兩人は、中国の対外貿易の全体に占めるイギリス綿製品の位置と、△現物取引▽の原因とを以上の如く捉えており、これは、先のイギリス綿工業の側から見た見方とは対蹠的である。本国産業資本家と中国現地のイギリス貿易商人とは、共に△現物取引▽という表現を用いながらも、その内容および原因に対する認識を、それぞれの利害関係に照応して、異にしていたことになる。AⅡマセソンらが、五港開放後の全般的過剰貿易——自らのアヘンの過剰貿易をも含んだ——を前提せずに、イギリス

綿製品のみを指摘することは、確かに一面的ではある。しかし、彼らが、過剰貿易という、それ自体としては量的な供給過多を意味する表現を、綿製品のみに対して非難を集中させる形で使用していることから、逆に、過剰貿易が、単なる貿易品目の増加あるいは貿易量の増大に止まらず、中国現地のイギリス貿易商人の利害関係に何らかの影響を与える貿易構造上の変化 \parallel 質的变化を背景に持っていたことを窺わせるであろう。いま、貿易品目の増加という観点のみから見れば、イギリス綿製品と在中國イギリス商人との関係は、かつてのイギリス毛織物と東インド会社との関係に類似している。毛織物の場合は、中国へのその輸出を義務付けるといふ、イギリス政府の東インド会社への強制力に裏付けられていたが、綿製品と毛織物とは共に利益があらぬ商品であり、ダンピングされることにより市場進出が企てられたからである（中国市場内部の受け入れ側の問題については後述）。しかし、既に第二節において、国際的貿易決済機構が、イギリス綿工業の存在を背景に、ロンドン金融市場を中心として形成されており、中国がその一環に組み込まれていることについて見た如く、綿製品の中国進出は、生産および金融面において構造的に支持されていた。そうである以上、イギリス綿製品は、個々の貿易商人の貿易利害の思惑とは無関係に、中国へ輸出されうる可能性を自身のうちに持っており、過剰貿易の動因も、イギリス綿布の生産とそれを支える金融構造自体との中に存していた。この点の貿易構造への影響を次に検討したい。

まず、五港開放後における中国貿易の担い手について、特別委員会の委員の一人であり、リヴァプールの貿易事情に詳しいW＝ブラウン W. Brown は、

第四七三〇号。ハーコート氏 Mr. Harcourt「アメリカの船舶輸送は主に商人によっておこなわれているの

に対して、イギリスでは製造業者自身によっておこなわれている。この区別は成り立つか？——「アメリカでも一部は製造業者によっておこなわれていると思うが、かなり少ない程度だ。」⁽⁶³⁾

と証言した。ここに、貿易活動に対するイギリス産業資本自体の積極的関与を見ることができると言える。そして、他方、ジャーディン・マセソン商会と並ぶ、デント商会の G. T. H. Braine は、

……中国における「貿易」制度の変更（開港）以来、大量の新しい商社が登場した。しかし大商社の取引は、貿易の拡大に比例しては増加しなかった。なぜなら、取引の一部を担おうとする大量の競争相手がいたからだ。⁽⁶⁴⁾と証言している。これは、中国市場において、新しい外国商社が貿易活動に進出し、大商社の競争相手となっていたことを示している。これらの証言を踏まえ、当時の貿易活動を整理すると、以下のようなになる。即ち、イギリス本国産業資本家は、貿易活動に対して資金を提供する。貿易商人はその資金を前借りし、産業資本家の代理人として委託販売をおこなう。この結果、資本を持たない多くのイギリス商人が中国へ進出することとなり、従来からの在中國イギリス商人と競合関係に入った。これに加えて、第二節において見た如く、アメリカ商人の責任勘定によるイギリス工業製品の中国への輸出、という貿易拡大要因があった。これらの全体が、A. H. Masey の言う「過剩貿易」をもたらした原因であり、これが貿易関係の変化、即ち、イギリス産業資本を軸に編成された新たな貿易構造の内実である。

以上は、中国市場をめぐる国際的環境——イギリス綿工業を軸として世界的に編成された生産・貿易構造——が新たに整備されていく過程であった。そして、このような状況の下に、現物取引は、一方では中国における決済

手段としての銀の不足に規定され、他方では貿易拡大要因の増加による決済手段の不足に規定されるといふ、相乘的作用がもたらされた結果として惹き起こされた。

ところで、 ∇ 現物取引 ∇ をもたらしした過剰貿易とは、貿易関係において、決して単に貿易業者の活動に対して過剰であることを意味するのではなく、基本的には、中国市場の消費量に照らして過剰であることを意味する⁽⁶⁵⁾。そして、イギリス綿製品が中国市場において直ちに捌かれなかったことは、当時の駐上海イギリス領事オルコックが、「アヘン貿易が年々発展・増加するのに反して、イギリス工業製品の輸入は名目上は自由であるが、内地への進出は事実上阻止されており、利益ある市場の開拓は極めて限定されている⁽⁶⁶⁾」と慨嘆している通りである。しかし他方では、上海への綿布輸入量は増加し続け、一八四七年の上海市場では、シャーティングの七〇万から八〇万反の滞貨を生じている⁽⁶⁷⁾。そこで、このような過剰貿易に起因する ∇ 現物取引 ∇ が中国の開港場で如何にしておこなわれていたのか、その具体的機能を以下に検討したい。

まず、 ∇ 現物取引 ∇ が開始された時期について見ると、開港後の上海市場において、イギリス工業製品に対する支払いは、一八四三―四五年頃までは銀でおこなわれ、それ以降 ∇ 現物取引 ∇ となったようである⁽⁶⁸⁾。一八四七年には、イギリス商品の交易は中国の生糸商人・茶商人との間に限られており⁽⁷⁰⁾、イギリス商人が買上げる茶の量に完全に規定されるようになっていた⁽⁷¹⁾。上海領事オルコックは一八四七年の貿易報告に、

上海の取引は現在ではほとんど現物取引になっている。その限度内で輸入品が市場に捌かれる。アヘンと綿製品とは生糸と茶とに交換され、余剰のアヘンに対してのみ、中国人消費者によって銀が支払われる。ロングー

クロス(上質の漂白綿布)が生糸と、アヘンが茶と、それぞれ交換される場合もあるが、アヘンと生糸、茶と綿製品という〔組合わせの〕交換が、主におこなわれている。⁽⁷²⁾

と、アヘン・綿製品と茶・生糸とが相互に Δ 現物取引 ∇ の対価物となっていることを述べている。このうち、アヘンおよび生糸は、従来は共に現金取引であったが、生糸は一八四五年以来 Δ 現物取引 ∇ 品目となり、⁽⁷³⁾アヘンは最も遅く一八四六年以降生糸と交換されるようになった。⁽⁷⁴⁾これは、茶よりも生糸の方がイギリス本国市場で割高に販売されるという事情に基いていた。⁽⁷⁵⁾上海における貿易取引が Δ 現物取引 ∇ へと移行した右の経過は、中国の貿易中心港が広東から上海へと移行を開始したことに伴う貿易拡大——国内市場に対して果す上海の固有な役割を基礎とする——の結果である。上海と広東とにおける開港後の貿易額の変動を、表9および表10に示す。この表によって、広東における貿易額の減少傾向に対比して上海が増加傾向を見ていることがわかる。生糸以外については上海の貿易絶対額がまだ少ないにも拘らず、上海の生糸・茶の集積地⁽⁷⁶⁾化や、「広東への輸入も、その二〇から五〇%は上海へ再移出される」という事実があることから、両者の貿易傾向の中に中心港の移行問題を窺うことができる。そしてさらに、これらをその根底において支えた問題として、上海が、イギリス工業製品の中国内地市場に対する一大集積基地、即ち華北市場と揚子江沿岸市場とに臨む中心基地と見なされていたという点があるために他ならない。外国商人は、広東が対インド貿易と対イギリス貿易との混合した貿易港であるのに対し、上海がイギリス・アメリカ・ヨーロッパとの直接貿易の基地たるべきことを期待し、沿海地域に限定されている通商活動を打開するために、「揚子江流域における通行税の負担増加」⁽⁷⁸⁾という内地市場の動向に注意を払いつつも、市場開拓上の新たな拠点と

表 9 上海港における対イギリス貿易額 (単位: 1,000ドル)

輸 入							
商品名	1843-44	1845	1846	1847	1848	1849	1850
綿 製 品	1,671	4,255	3,080	3,311	1,836	3,052	2,618
毛 織 物	557	804	623	782	327	809	501
砂 糖	2			43	170	82	147
雜 貨	292	136	186	176	200	470	643
計	2,522	5,195	3,889	4,312	2,533	4,413	3,909
輸 出							
茶	322	2,221	2,027	1,834	1,654	2,019	2,427
生 糸	2,003	3,806	4,430	4,819	3,331	4,417	5,529
雜 貨	35	19	35	73	96	78	65
計	2,360	6,046	6,492	6,726	5,081	6,514	8,021

資料: BPP., *Report by Mr. Robertson, Her Majesty's Consul at Shanghai on the Trade of that Port during the year 1856*, p. 46.

表10 広東港における対イギリス貿易額 (単位: 1,000ドル)

輸 入							
	1844	1845	1846	1847	1848	1849	1850
綿 製 品	4,727	2,764	2,755	2,501	1,213	1,476	1,617
毛 織 物	2,899	1,875	1,387	1,627	1,867	768	993
金 属	223	88	62	40	48	138	232
雜 貨	58	48	39	30	20	34	29
棉 花	6,816	4,728	4,925	4,686	2,792	4,770	3,432
上記以外のイ ンド・海峡植 民地商品	783	1,213	830	741	595	717	594
計	15,506	10,716	9,998	9,625	6,535	7,903	6,897
輸 出							
茶	13,433	15,826	11,113	11,848	7,382	9,336	7,673
生 糸	2,172	2,425	1,344	1,808	444	860	1,010
絹 織 物	401	522	426	386	167	415	486
雜 貨	1,919	1,961	2,496	1,680	660	875	750
計	17,925	27,734	15,379	15,722	8,653	11,486	9,919

資料: BPP., *Report by Mr. Parkes, British Consul at Canton on the Trade of that Port during the year 1856*, p. 30.

して上海を位置付けていた。また、上海と広東との関係について言えば、イギリス商人が広東か上海かのいずれか有利な市場に商品を送り、時によつては、上海から広東へ再移出したことも報告されている。⁽⁷⁹⁾

ただし、ここで注意しておきたいことは、広東から上海への中心港移行が、上海の單純な広東化としておこなわれたのではなかった、ということである。その特徴的な現われとして、一八四六年から四八年にかけての上海における茶の輸出货量減少・価格下落に関連した、広東人 Alum (Alum) の経営になる Esang (怡生あるいは義生) 行の倒産事件がある。上海開港後、彼は外国商人から八千ドルを借り受け、広東に倣つて中国商人と外国商人との仲介業・倉庫業の信用業務を開始し、一八四五年には上海の總取引の三分の二に関係しているといわれた。しかし、一八四六年、買占の破綻から九〇万兩の負債を残して失踪した。⁽⁸⁰⁾これを一つの契機として、上海の現地では、外国商人と中国商人との直接的な取引関係が如何にして形成されるか、という点が大きな問題となった。この問題の打開策は、この段階において、△現物取引▽という形で実現した。この△現物取引▽が如何にしておこなわれるかということにつき、ギブリーヴィングストン商会の T. A. Gibb —— 十数年間中国で貿易活動に従事。広東、後に上海にて活動——は、特別委員会において、次の証言をおこなった(以下、第五六三—五七三号)。

第五六三号。議長 Viscount Sandon 「現物取引がおこなわれる経過を詳しく説明してくださいさるか?」——

「私がマンチェスター製綿製品一〇〇〇反のシャーターイングを持ってしていると仮定する。私は見本を何人かの「中国人の」買手に示す。彼らは誰も、現金でそれを買う、あるいは、いくらで信用買いをする、とは言わないだろう。もし彼らが手元に、私に示す茶を持っていない場合には、私はこれらの商品に、市場価格で換算して、

Congou (工夫茶) を支払おう」と言う。しかし、広東では、公行の廃止以来信用は非常に不安定であったから、我々が信用できる人間はほとんどいなかった。だから、我々は、茶を手に入れるまで我々の商品を渡さなかった。……」(中略)

第五七二号。「もしあなたが、不安定な茶市場における価格に基いて茶を受け取る以外に方法がないとしたら、手持ちのシャーティンクの販売に当って、「価格の」見積りをどのようにするのか?」——「我々はシャーティンクの価格を決定するが、茶の価格は決定しない。」

第五七三号。「あなたはシャーティンクの現金取引の価格を言うのか?」——「現物取引の価格を言う。私がシャーティンクを三ドルで売るとしたら、そのことは、茶の市場価格に基いて、二カ月以内に茶で支払われることだと理解される。」⁽⁸¹⁾

ギブは、一、信用が不安定であるため、商品の授受を同時におこなったこと、二、この現物取引の価格決定に際し、イギリス綿布はイギリス商人が、中国茶は中国商人が決定し、茶の価格決定には市場価格が基準となっていること、三、現金取引価格と現物取引価格とが存在していること、⁽⁸²⁾を述べている。この三点は、換言すれば、一、商業信用を如何にして確保するのか。二、現物取引において価格算定の基準を如何にして設定するのか。即ち、取引方法および取引基準の問題が、三、銀不足、銀需要という基本的条件の下で、如何にして解決されているのか、という問題にそれぞれ対応している。第二節において既に明らかにした、銀不足、銀需要の問題を前提とし、ここでは一および二を検討する。まず、二の現物取引における価格の算定基準について見てみよう。ギブの証言は、茶が

表11 上海における Grey Shirtings の価格変動

船積日	マンチエスターにおける Shirts, 72 Reed. 1反の価格		販売日	1反当りの販売価格		1ドルを4s. 6d. としてスターリングに換算		純送金額 (イギリスにおける税金、経費を含む)	
	s.	d.		s.	d.	s.	d.	s.	d.
1844			1844	\$	c.	s.	d.	s.	d.
1月	9	9	6月	3	75	16	10 $\frac{1}{2}$	14	3
4月	11	—	9月	3	50	15	9	13	2 $\frac{1}{4}$
7月	10	6	12月	3	50	15	9	13	2 $\frac{1}{4}$
			1845						
10月	10	—	3月	3	50	15	9	13	2 $\frac{1}{4}$
1845			1845						
1月	10	3	6月	3	40	15	3 $\frac{1}{2}$	12	9 $\frac{1}{4}$
4月	10	4 $\frac{1}{2}$	9月	3	15	14	2	11	8 $\frac{1}{2}$
7月	10	6	12月	3	20	14	4 $\frac{3}{4}$	11	11 $\frac{1}{4}$
			1846						
10月	10	3	3月	3	20	14	4 $\frac{3}{4}$	11	11 $\frac{1}{4}$
1846			1846						
1月	9	9	6月	3	00	13	6	11	1
4月	9	6	9月	2	95	13	3 $\frac{1}{4}$	10	9 $\frac{3}{4}$
7月	9	3	12月	2	95	13	3 $\frac{1}{4}$	10	9 $\frac{3}{4}$
10月	—								

註：中国における課税は1反につき14セント。1ドルを 4s. 6d. に換算し 7 $\frac{1}{2}$ d.

資料：BPP., *Select Committee Report*, 1847, p. 148.

市場価格に基いて決定されると述べているのに反し、綿布価格については、イギリス商人が決定すると述べるのみで、基準をとくに明示してはいない。綿布価格は、果して、イギリス商人の恣意の下に決定せられ、買手側の条件は加味されていないのであろうか。そこで当時の上海における綿布価格を見ると、表11となる。この表は、グレイシャーティンダの価格下落を示している。さらに、表には見えないが、一八四七年恐慌の結果、綿製品の価格が下落している。このことを、先の中国市場における販売不振という事実と照応させ

表12 Congou (工夫茶) の価格変動

年	輸入量 (単位:1,000 重量ポンド)	販売量・消費 向きの保存量 (単位:1,000 重量ポンド)	税 収 入 (単位:1,000 ポンド・ス ターリング)	1重量ポンド当りの 平均価格
1838	40,414	32,352	3,362	1s. 1d. ~2s. 4d.
39	38,158	35,127	3,659	2s. 3d. ~3s.
40	28,022	32,253	3,473	2s. 2d. ~2s. 8d.
41	30,788	36,676	3,974	1s. 9d. ~2s. 3d.
42	40,742	37,356	4,089	1s. 1d. ~2s. 3d.
43	46,613	40,293	4,408	11d. ~2s.
44	53,147	41,364	4,524	10d. ~2s. 4d.
45	51,057	44,193	4,833	8 $\frac{1}{2}$ d. ~2s. 2d.
46	56,503	47,534	5,199	8 $\frac{1}{2}$ d. ~2s. 2d.

資料: BPP., *Select Committee Report*, 1847, p. 503.

ると、 \wedge 現物取引 \vee における綿布価格は、形式上は売手側が提示した数字であるが、その内容は、価格引上げの実現を示すものではなく、売手側のこの価格「決定」の中に、価格を下げさせるといふ購買者の意志が働いていると言えよう。したがって、問題は、右の如き価格の実質的決定要因が他に存在するにもかかわらず、なおかつ、売手の外国商人が価格を提示することの意味はどこにあるかということであろう。それは、 \wedge 現物取引 \vee が持つ価格調節機能と無関係ではありえないと思われる。即ち、販売と結びつかぬイギリス綿製品の市場価格が一方的に下落することを如何にして防ぎつつ、同時に、その下落をダンピングとして最も有効に販売へ結びつけるか、という問題の差当っての解決として、 \wedge 現物取引 \vee がおこなわれたということである。このことは、 \wedge 現物取引 \vee の対価物としての茶の価格決定過程をみることにより一層明らかになる。イギリス本国における茶の価格は表12に見る如く、輸入量の増加に伴って下落傾向を示している。しかし、中国現地にあつては、従来からのアヘン—茶貿易に、アメリカ商人に

よる茶購入の増加、および綿布と△現物取引▽される茶の輸出増加という要因が加わり、茶の市場価格は、買手側の需要を反映して昂騰を見せた。⁽⁸³⁾このことは、本国では低価格によってしか販売できぬ、綿製品の対価物としての茶が、中国においては投機の対象となるという、需給関係の不均衡を表現している。即ち、イギリス本国市場における茶の消費量に基くというより、綿製品を中国へ販売するために、しかも、中国市場において茶価格が昂騰すれば、その茶価格が綿製品の価格決定に直結するという△現物取引▽の条件の下で、綿布価格の値下りを防止しつつ、売込みをはかるために、茶の投機が必要であるという事態に基くであろう。

かくして、△現物取引▽は、そこに見られる価格決定問題を通じて、イギリス綿工業⇨イギリス産業資本家にとつて、不可欠の取引形態⁽⁸⁵⁾であったことがわかる。即ち、△現物取引▽は、貿易過剰と決済手段不足とに制約された、いわば受身の対応の形態をとりながらも、むしろその現象を積極的に作り出すことを通じて中国市場を開拓せんとするイギリス産業資本家の市場開拓策としての機能をも持つものであった。従つて、この市場開拓策としての△現物取引▽は、現地のイギリス商人に対しても、売込みの便宜を与えたのであった。この点に関連し、△現物取引▽に見られる信用問題について、A・ウィルキンソン——前出——の証言には、

第一三二五号。マゼソン氏「あなたは、現金を手に入れることができなから商品を受取るのか？」——「現金を手に入れることはできない。我々は、買手がつかなくなるといふ危険を冒すことを望まない。」

第一三二六号。スプーナー氏「あなたは以前に、現物取引は過剰供給から生ずると述べた。その答と今の答とはどのようにつながるのか？」——「何種類かの商品が過剰に供給されたことによって、我々は、さして信用

の置けない人々に販売することを余儀なくさせられた。ただし、そのような人々とも、生産物による現物取引ならば、我々は喜んで取引をする⁽⁸⁶⁾。」

とある。ここでは、現物支払いでならば購入に応ずる中国側の買手を確保するために、また、信用の置けぬ相手への販売を可能にするために、 Δ 現物取引 ∇ が利用されている。いわば、現物取引一般が持つ、商業信用の原初的形態としての、取引相手の確保と危険防止という機能の利用である。しかし、この見解が、イギリス綿製品を特定して非難する在中國イギリス商人のものであることを、銘記しておかなければならない。なぜなら、彼らでさえ、 Δ 現物取引 ∇ という状況下では、それが持つ原初的機能を利用することによって、綿製品の販売が可能であるとしているからである⁽⁸⁷⁾。

以上、本節を通じて見てきた如く、一八四〇年代後半の中國開港場における Δ 現物取引 ∇ は、貿易過剰と銀不足という、それ自体としては消極的な与件のもとにありながらも、それに価格調節機能を積極的に持たせることによって、この時期におけるイギリス綿工業にとって、中國市場拡大策としての性格を持つに至ったのである。

その結果として、この Δ 現物取引 ∇ 策の遂行に当り、イギリス産業資本家にとって、二重の目的で、貿易活動に對して、なかならずく現地の貿易商人に對して、資金を供給することが必要となった。即ち、一方では綿布輸出諸経費の、他方では、茶の運搬資金の需要に應えるためである⁽⁸⁸⁾。

そして、この資金供給の使命を担うものこそ、まさに、中國への銀行進出であった。中國に最初に進出した外国銀行はオリエンタルバンク Oriental Banking Corporation (麗如銀行)であり、一八四五年に広東に、一八四

八年に上海に、それぞれ支店を開設している。他方、中国商人に対するこのオリエンタルバンクの活動について、一八四七年に、駐広東イギリス領事マクグレガー Macgregor は、次のような報告を送った。

中国人商人が現在採用している、茶輸出の大部分を自己の責任勘定によっておこなう、という方法も、イギリス宛の為替相場を一層つり上げる傾向があるようだ。なぜなら、当地（広東）でおこなわれる、運搬費用の前貸しは、生産物（茶）に対して振出される手形の値を高くするが故に、常にはないが一般的には「この前貸しは」現金キャッシュでおこなわれるからだ。この方法を実行するために、当地に設立されたオリエンタルバンクは、大きな便宜を与えている。⁽⁸⁸⁾

先の特別委員会の報告（一四二頁参照）および右の報告に見られる如く、一八四五―四七年には、〈現物取引〉された中国茶の輸出が、中国商人の責任勘定によっておこなわれるようになった。そして、まさにこの茶輸出に際し、外国銀行は、資金を中国商人に貸与し、他方では値上りした為替を買うという有利な資金操作をおこなっているのである。このオリエンタルバンクの資金について、一八四八年、駐上海イギリス領事 R ーオルコックは、

今迄「上海に」輸入されてきた正貨は、主として、上海に支店を持つオリエンタルバンク宛のものである。

その銀行が提供できる「資金上の」便宜は、「年間」一八万から二〇万ドルである。この便宜が、信用貸しをおこなって貿易を促進する傾向をもたらすであろう、と当初予想された通りに、この港の利益にとって実際に都合がよかったか否かについては、問題とすべき余地がおそらくあるかもしれない。⁽⁸⁹⁾

と報告している。ここには、銀行の機能が、一八四〇年代末には、必ずしも十分に発揮されてはいないが、正貨を

導入している事実が示されている。この外国銀行の活動を「現物取引」との関連において見るとき、確認されるべき「現物取引」の歴史的意義は、新たな貿易構造に見合せて、中国において不足している銀、即ち、需要の多い銀を、外国銀行がイギリス本国から輸入して中国商人に貸付ける——当然のことながら、かかる事態の下では、本国イギリスの資本を持たぬ商人の対中国貿易に資金を貸与することもおこなわれていたのであるが——という事態に見られる如く、イギリス本国金融資本の中国進出を招いたことにある、と言えよう。

かくして、「現物取引」と金融資本進出との結びつきという、貿易市場での一見極めてパラドキシカルな事態は、一方において「現物取引」が積極的に再生産されることによって、促進された。このようにして、当時の「現物取引」は、中国貿易市場開拓を果すべき金融的機能をも持つにいたり、中国における外国銀行の進出史、形成史と特殊に結びついていたのである。

おわりに

「現物取引」は、過剰貿易と決済手段の不足と——それ自身、アヘン戦争後の中国開港場における経済的特徴をなす——に規定され、形式においては、主にイギリス綿製品と中国茶とを交換する現物交換であった。しかしながら、この「現物取引」に内包された問題は、それが決して単純な物々交換であったことを意味していない。何故ならば、イギリス綿工業を軸に編成された、イギリス—アメリカ—中国間の新たな三角貿易構造に、中国市場が組み込まれ、かつそれと表裏一体の関係をもつ、ロンドン金融市場を中心とする国際的金融機構の中に、中国金融市場

が組み込まれて、その内部より、 Δ 現物取引 ∇ が現象したからである。従つて、この國際的環境の下で惹き起こされた Δ 現物取引 ∇ は、イギリス綿工業の市場拡大策としての性格を持ち、綿製品の過剩貿易と中国茶の投機とを積極的な動因として促進されたと言えよう。その結果、 Δ 現物取引 ∇ にもまさに不可欠の運営資金——輸出、輸入のいずれにとつても——が中国市場におけるイギリスおよび中国の貿易商人によつて需要されるに至り、それを満たす役割を担つたものが、イギリス金融資本の中国進出としての、いわゆる外国銀行の進出であつた。

ところで、外国貿易が Δ 現物取引 ∇ によつて遂行されたにしても、当時の中国内地市場は、無論、現物経済ではない。従つて、そこに、銀少 \parallel 銀貴状況を現象させた如く、基本的に銀・銅錢に基く貨幣経済が展開していたことは言うまでもない。一八四九年、駐上海イギリス領事 R \parallel オールコックは、上海における貿易取引とその背景の内地市場とについて、次の如き報告をおこなつた。

茶商人は、茶を上海に運んで来て、それを売却して換銀するか、或は、現物取引によつてロングークロス（上質の漂白綿布）を手に入れる。彼らは、これらのロングークロスを、上海で蘇州の仲買商人に売るか、或は上海の錢莊に販売を委託する。錢莊は彼らに綿布の前払金——しばしば八〇％程度である——を例えば二〇日満期の約束手形で支払う。この手形に対しては、一カ月につき *per mensem* 一・五％の利息を課す。錢莊は今度は綿布を蘇州へ送り、そこで売却し、茶商人と清算する。損益にかかわらず、これらにかかった経費は茶商人が全額支払う。錢莊は、一般的にいつて、二〇日以内で取引を完成させることができる。ただし、彼らの莊票が信用のおけるものであれば、茶商人はそれを現金化する際に少い減価を被るに止まる。茶商人はしばしば、

購入した綿布を自ら蘇州へ運ぶ。しかし、より普通の方法は、ここ（上海）で蘇州の仲買人に売る方法である。そして、茶商人は銀を持ち帰るか、杭州商人から約束手形を受取る⁹³。……

ここに見られる如く、外国綿布の中国内地市場への進出は、錢莊の仲介を經ておこなわれている。

そして、一八五〇年代に至ると、上海における錢莊は、次のように貿易金融機能を担っていた。即ち、ノースー
チャイナーヘラルド North-China Herald 22 號 257

五千から一万兩^千の資本金を持つ錢莊は、二つのグループから成っている。その營業は、一つは、「外国」工業製品、海峽植民地の産物を取扱う商人への前貸しに限られており、他の一つはアヘン仲買人への前貸しに限られている。これら、信用ある商人達への前貸しを業務とする錢莊は、工業製品またはアヘンを購入するときに一〇日から二〇日払いの莊票で支払をおこなう。∴外国商人は、錢莊が「みずから」恃むべき資力を持っていることを知っているので、彼等が販売した商品の代価として、これらの莊票を受取る⁹⁴。

とあり、錢莊活動の拡大に伴い、外国商人は内地貿易にあつて、この錢莊を利用するに至っている。ここに、銀少Ⅱ銀貴の状況下、既述の如く、外国資本によって貿易商人に資金が貸付けられたばかりでなく、その貿易商品としての内地生産物集積のために、中国内地商人に対し、外国資本が資金の貸付をはかるという事態もまた、外国貿易の經濟循環にとって基本的な要件として、準備されつつあった。かくして、中国内地市場を開拓せんとする列強の産業・金融資本は、一八五〇年代に至つて、この錢莊が内地市場に対して持つ金融上の、また信用上の機能と結合しようとするのである。ところで、このような事態は、一八五〇年代の後半にかけて、上海市場において開港以

来空前の金融的過熱状況をさへ発生せしむるに至つたのであるが、この問題は、本稿の論旨を継承すべき次稿に譲ることとした。

註

(1) 近代中国の貨幣制度を本位問題の側面から把握する方法は、以下の三つに大別される。①広義の本位通貨は存在しない——銅貨が中国の真実の通貨である——(Edward Kann, *The Currencies of China*, 2nd ed., Shanghai, 1927, p. 1) ②銀本位 Silberwährung を維持してきた (Bao-Seing Liao, *Die Bedeutung des Silberproblems für die Entwicklung der chinesischen Währungsverhältnisse*, Berlin, 1939, S. 6-7. 『支那幣制の性格的研究』勝谷在登訳、白揚社、一九四〇年、一三一—一四頁)。③構造としては銀・銅複本位であるが、銀一兩 \parallel 制錢千文であつて両者の同一重量の比価が一對一〇〇と懸隔しており、かつ両者が独自の流通分野を持つてゐることから、近代貨幣制度上における複本位とは異なる(葉世昌『鴉片戦争前後我国的貨幣學說』上海人民出版社、一九六三年、五一—七頁)。以上の三つの見方である。しかし、本位制度は、単に国内的的或いは国家行政的な事象としてその形式のみが論ぜられるべきではなく、その背景となつてゐる貨幣流通、信用および市場関係の時代的展開の中で、具体的には、中国・ア

(東京大学人文科学研究科博士課程)

シアの近代における通貨制度がイギリスを中心とする国際的金本位制との関連における銀流通圏内に形成されたという、国際的金融関係にのつとつて検討されねばならないと考えられる。中国にあつて、③の葉世昌の指摘にあつた如く、表価貨幣としての銅錢と秤量貨幣としての銀兩との流通面における矛盾、また、国際的影響が強かつた銀の流入・流出問題からみて、国内・国際関係共に、本位問題を銀錢いずれかの択一に解消することはできなうである。以上の問題関心に基いて、ここでは「銀中心国」という表現を用いた。この問題については別稿で論ずる予定である。

(2) 流出・流入とは、その時期が流出もしくは流入のいずれか一方であるということの意味するのではなく、流出 \downarrow 流入関係の差額がいずれであるかを表わしてゐる(後述)。
(3) この時期区分は以下を参考にたてた。

H. B. Morse, *Chronicles of the East India Company trading to China, 1635~1834*, 5 vols., Oxford, 1926~1929.

E. Kann, *The Currencies of China*, Shanghai, 1927.
小竹文夫「明清時代における外国銀の流入」『近世支那

『經濟史研究』弘文堂書房、一九四二年。

百瀬弘「清代に於ける西班牙弗の流通」(甲)(乙)『社會經濟史学』六卷一、三、四号、一九三六年。

譚彼岸「中国近代貨幣的變動」『中山大学学報』一九五七年第三期。

魏建猷『中国近代貨幣史』上海、一九五五年。

(4) 銀貴に関連する問題には、中国における高額貨幣需要の増大を背景に、(一)銀の流出によるのみならず、その退蔵による銀少り銀貴、(二)徴税における折価のつりあげ、(三)錢莊による銀相場つりあげ、などがあり、錢賤に関連する問題には、(一)制錢の粗悪化、(二)私鑄錢の増大、(三)錢票の乱発などがあって、この銀貴・錢賤の両者が相互に作用して、社会的影響——諸階層間にその意義を異にした——をさすやう大なるものとしていた(楊端六編著『清代貨幣金融史稿』三聯書店、一九六二年。彭沢益「鴉片戦後十年間銀貴錢賤波動下の中国經濟与階級關係」『歴史研究』一九六一年六期。ほか)。この問題の検討は別稿であらう。

(5) 黃爵滋「嚴塞漏卮以培國本疏」『籌辦夷務始末』道光朝、卷二、四一—五一。

(6) R. Montgomery Martin, *China, Political, Commercial and Social; in an Official Report to Her Majesty's Government*, London, 1847, Vol. I, p. 176.

近代中国における貿易金融の一考察 浜下

E. H. Pritchard, *The Crucial Years of Early Anglo-Chinese Relations, 1750~1800*, Research Studies of the State College of Washington, Vol. IV, Nos. 3-4, Sept. & Dec. 1936, p. 103. に拠って、一七五〇・七一両で換算すると、三億六千万両となる。

(7) British Parliamentary Papers (以下 BPP と略称), *Extracts from a Despatch from the Governor of Hong Kong*, dated 4th September 1855, which was forwarded to the Treasury from the Colonial Office, in a letter dated 1st March 1856. などとして使用する BPP. は、イギリス Irish University Press Area Studies Series, British Parliamentary Papers, China, 42 vols., 1971—1972 の 6, 38-40 に収録されている。

H. B. Morse, *The International Relations of the Chinese Empire, the Period of Conflict 1834~1860*, London, 1910, p. xxxix. に拠って、一七五〇を二両で換算すると、二億両となる。

(8) ただし、「貿易差額」の観点が皆無であつたわけではなからう。例えば魏源は、「道光一七(一八三七)年の貿易狀況を云ふ」

共計外夷歲入中國之貨、僅值銀二千四百八千員、而歲運出口之貨、共值銀三千五百有九万三千員、以貨易貨、

歲應補中国価銀千四百九十四万五千員。使無鴉片之毒，則外洋之銀有入無出，中国銀且日賤，利可勝述哉。（『籌海篇』四、議款、『海国図志』巻一、五十五丁）と述べている。

なお、官僚の上奏文中に挙げられている銀流出額は、その主張の効果を増すために、誇張が多いことは事実である。しかし、中には、例えば两江總督李鴻章の道光九（一八二九）年六月初一日の上奏のように、「臣等復調查洋商（広東十三公行）貿易出入貨簿」（故宮博物院『清代外交史料』道光朝三、十丁）など、出所を明らかにして外国側統計に類似する報告もある。表一のおおむね、マニラ輸入を直ちに銀流出と見做す数字もあり、もとより正確ではなからが、中国官僚の記す銀流出を仮に実数とした場合の矛盾点を明らかにするごとくを通じて、彼らの捉え方に存する矛盾を示す、としよう限られた目的のために数字を掲げたに止る。

- (9) BPP, *Returns of the Trade of the Various Ports of China, for the Years 1847 and 1848*, Presented to the House of Commons by Command of Her Majesty, August 1849, No. 5, Mr. Bonham to Viscount Palmerston.——(Reviewed June 21.), Inclosure 5, *Report on the present State and Prospects of British Trade, in reference more especially to the*

Imports of Opium and Export of Specie, p. 72.

(10) *Ibid.*, p. 73.

(11) BPP, *Returns of the Trade of the Various Ports of China for the Year 1846*, p. 42, Canton. (以下頁数の後に掲げた地名ならし年号を、当該頁に記述をいづる開港場ならし該当する年度を示す。)

(12) BPP, *Report from the Select Committee on Commercial Relations with China; together with the Minutes of Evidence, Appendix, and Index*, Ordered, by The House of Commons, to be Printed, 12 July, 1847 (以下、Select Committee Report, 1847, 文部記), p. 66. (以下キンの語句は凡そ(一五六頁参照)。

(13) BPP, *Returns of the Trade of the Various Ports of China for the Year 1846*, p. 36, Canton.

(14) BPP, *Select Committee Report*, 1847, pp. 354, 363.

(15) *Ibid.*, p. 25.

(16) E.H. Pritchard, *op. cit.* の「總の」一表を以下に添へておぼした。

(17) M. Greenberg, *British Trade and the Opening of China 1800~42*, Cambridge, 1951, pp. 159-160.

(18) BPP, *Select Committee Report*, 1847, p. 340.

(19) *Ibid.*, p. 107. 以下、中国側資料の追加は以下

以下の如く外国商人の銀投機を指摘している。

至偷漏之由、係因廣東民間專用洋錢、其風漸行于江・浙等省。于是洋商私用紋銀收買洋錢、与江・浙茶客交易、作價反高於紋銀。(貴州道監察御史黃中模「請嚴禁紋銀偷漏出洋摺」道光二年二月二日、故宮博物院『清代外交史料』道光朝一、一四丁)

番舶以販貨為名、專載洋錢至各省海口收買紋銀。致內地銀兩日少、洋錢日多、近年銀價日昂、未必不由於此。又、鴉片流行內地、吸者日衆。(軍機處寄「兩広総督李鴻賓等嚴禁洋錢・鴉片上諭」道光九年二月一日、同前、道光朝三、二二丁)

- (20) Greenberg, *op. cit.*, p. 160. BPP., *Returns of the Trade of the various Ports of China, for the Year 1849*, p. 9, Canton. BPP., *Select Committee Report*, 1847, p. 341.

(21) スペインドル・メキシコドルを馬蹄銀に铸直すことについて、インド鑄造局においては、一八三二年当時、一重量ポンドの馬蹄銀に金一二グレインが含まれていると評価され、他方、同量のスペインドルには四グレイン以下の金しか含まれていないと評価されている。このことから、インドにあるイギリス商社・パーマー商会 Palmer & Co. の J. H.パーマーは、一八三二年に開かれた下院の東インド

近代中国における貿易金融の一考察 浜下

会社問題特別委員会で、「中国にある馬蹄銀は、スライムドルが溶解され「て鑄造され」たものではない」と証言」(K. N. Chaudhuri, ed., *The Economic Development of India under the East India Company, 1814 ~ 58, A Selection of Contemporary Writers*, pp. 191-193)。このより、外国銀貨が鑄直されたのは、中国における銀不足の時期のみであると推測される。

- (22) BPP., *Returns of the Trade of the various Ports of China, for the Year 1849*, p. 9, Canton.

(23) *Ibid.*, p. 10.

(24) *Ibid.*, p. 12.

(25) 広東における為替購入の大部分は、イギリス商社・パーマー・ヤンセン商会がおこなっており(一八三二年には全体の四分の三)、イギリスへの送金は、ボンハイからより一層有利にできたことから、この送金を確保するために、ボンハイの商人は毎年大量のマルワアヘンを持たんだ (Greenberg, *op. cit.*, pp. 162-165)。この問題については、'本山美彦「イギリス資本主義の世界化とアジア——アヘンをめぐる東インド会社と広東商社の角逐——」『世界経済と帝國主義』小野一郎・行沢健三・吉信肅編、有斐閣、一九七三年、所収、参照。

(26) アヘン戦争に至る時期の中国の貿易構造については、

田中正俊「中国社会の解体とマヘン戦争」『中国近代経済史研究序説』東京大学出版会、一九七三年、参照。

- (27) W.T.C. King, *History of the London Discount Market*, London, 1936, p. 96. 『マヘン割付市場史』藤沢正也訳、有斐閣、一九六二年、二二四頁。Greenberg, *op. cit.*, p. 162. L.H. Jenks, *The Migration of British Capital to 1875*, London, 1963, p. 360.
- (28) 浜田好通「産業資本段階におけるアメリカの外国貿易」『流通経済論集』六巻一号、一九七一年、三三—三八頁。
- (4) 『流通経済論集』六巻一号、一九七一年、三三—三八頁。
- (29) Jenks, *op. cit.*, p. 360.
- (30) BPP., *Returns of the Trade of the Various Ports of China, down to the latest period*, Presented to the House of Commons, in pursuance of their Order of January 22, 1847, p. 51, Canton.
- (13) BPP., *Returns of the Trade of the various Ports of China, for the Year 1849*, p. 9, Canton.
- (32) BPP., *Select Committee Report*, 1847, p. 356.
- (33) 五港開放後のアメリカの対中国貿易の入超額、対イギリス棉花貿易、および両者の割合は補表1となる。対中国貿易の入超額はイギリスへ輸出した棉花額の三%から七%を占めているにすぎない。しかし、貿易決済の問題から見ると、少額の入超額の支払が多額の棉花輸出にリンクされ

たことによつて、中国貿易の決済手段は、イギリス綿工業の動向に規定されるという条件の下ながら、大きく拡張される余地を残していったと考えることができる。

- (34) BPP., *Select Committee Report*, 1847, p. 63.
- (35) 豊原治郎『アメリカ商品流通史論』未来社、一九七一年、二二四—二九頁。
- (36) アメリカの対中国貿易構成は、一八四六年を例にとると、補表2となり、活動地域が広汎であることがわかる。
- (37) リヴァプールの東インポート中国協会の議長Wニコル(後出)は、買付価格の差は二〇%だめなつたと証言してゐる(BPP., *Select Committee Report*, 1847, p.49)。
- (38) *Ibid.*, p. 296. 財務官ジョージイギリス政府から中国に派遣されたR=M=トーチマンRobert M. Martinの証言。
- (39) *Ibid.*, p. 357. 中国との茶貿易に精通するマサートンR=W=トーチマンW. Brownの証言。
- (40) BPP., *Returns of the Trade of the various Ports of China, for the Year 1849*, p. 11, Canton.
- (41) *Ibid.*, p. 9, Canton.
- (42) BPP., *Returns of Trade of the various Ports of China, for the Year 1846*, p. 42, Canton.
- (43) 註(41)と同じく、領事シウリングの報告に拠る。
- (44) 戦争中、イギリス本国に六〇〇万ドルにのぼる馬蹄銀が

- 広東から搬出された(一二五頁参照)。そしてこの時期に「シャーディン・マセソン商会は一〇〇万ドル近くインドルに運んだ(BPP, *Select Committee Report*, 1847, p. 341)。また、銀が豊富であったという指摘は、アーマセンの証言(*Ibid.*, p. 207)に見え、アヘン戦争後の上海における銀の減少については、初代駐上海イギリス領事G = マルフォブ G. Balfour の証言(*Ibid.*, p. 363)がある。
- (45) *Ibid.*, p. 208. A = マセソンの証言。
- (46) *Ibid.*, p. 340.
- (47) *Ibid.*, p. ii.
- (48) *Ibid.*, p. iii.
- (49) 特別委員会が証人喚問の際におこなった質問およびそれに対する証人の解答の一問ごとに付した番号である。この特別委員会報告には第四九一―一号までの問答がある。
- (50) 損失は、綿布の生産・販売の総経費八八六ポンド一九シリング八ペンスと茶販売後の手取り額四一六ポンド四シリング四ペンスとの差額の四七〇ポンド一五シリング四ペンスであり、五三%にも及ぶ。
- (51) 商品の発送から販売まで八カ月を要している。また、補表3に拠ると、六カ月から一四カ月までの幅がある。当時ロンドンから上海までに要する日数は、一八六〇年代における快速船で一〇〇〜一二五日である(B. Lubbock,

近代中国における貿易金融の一考察 浜下

補表 1 アメリカの対中国貿易の入超額と対イギリス棉花輸出額
(単位: 100万ドル), 及びその相関 (%)

年 度	アメリカの対中国 貿易の入超額 A	アメリカの対イギ リス棉花輸出額 B	$\frac{A}{B} \times 100 = \%$
1842	3.5	64	5.5
43	2.0	61	3.3
44	3.2	78	4.1
45	4.9	73	6.7
46	5.1	73	7.0
47	3.7	105	3.5
48	5.8	89	5.9
49	3.9	97	4.0
50	5.0	101	5.0

資料: 表4の資料, 及び^{*} Stuart Bruchey, *Cotton and the Growth of the American Economy: 1790~1860, Sources and Readings*, Michigan State Univ., 1967, pp. 16-17, 22.

補表 2 1846年のアメリカ船の対中国貿易活動 (単位: 1,000スペインドル)

商品名	輸 入 元	総 額
毛織物	リヴァプール, ポストン, ニューヨーク	5
綿製品		801
びんろうじ	シンガポール, パタヴィア	76
棉花	ニューヨーク, カルカット, ボンベイ, リオ	113
朝鮮人参	ニューヨーク, ポストン, マニラ	313
籐	シンガポール, パタヴィア	54
米	ランボック, シンガポール, マニラ	54
毛皮	ニューヨーク	27
貴金属		426
計		2,034
輸 出 先		
桂皮	ニューヨーク, ポストン	75
生糸	マサトラン (メキシコ), ニューヨーク, ポストン	58
砂糖	ヴァルパライズウ(チリ), カラオ(ペルー), サンド イッチ諸島	26
茶	ニューヨーク, ポストン, ヴァルパライズウ	4,756
絹織物	ニューヨーク, ポストン, リオ, マサトラン, ヴァ ルパライズウ, カラオ	946
計		6,207

資料: BPP., *Returns of the Trade at Canton and Hong Kong, 1847*, pp. 2-3.

(註) 輸出入品目には、アメリカ船による仲介貿易品 (例えば朝鮮人参はアメリカ・朝鮮・日本産などより成る。cf. E. Watson, *The Principal Articles of Chinese Commerce*, 2nd ed., Shanghai, 1930) を含む。

補表 3 イギリス船製品販売の損益

船積日	船名	反数	送り状の総額 (イギリスにおけ る経費を含む)	販売日	総額 (ポンド)	為 替 (1ポンド につき)	総額 (ポンド)
1844			£. s. d.		\$ c.	s. d.	£. s. d.
4月	Eleanor Russell 号	43ペイナル	1,279 19 5	1844, 12月	6,238 36	4 5	1,377 12 8
							23 10 2
							1,401 2 10
6月	Charlotte 号	1,300反	667 19 —	1845, 3月	3,595 35	4/3, 4/3 ¹ / ₂	771 3 7
7月	Charles Jones 号	800〃	462 2 —	1845, 9月	2,157 94	4 4	467 11 1
10月31日	Monarch 号	60〃	133 9 9	〃	670 44	—	145 5 3
1845							註(1)
10月31日	New Margaret 号	1,500〃	807 3 10	1846, 7月	2,813 32	—	609 11 —
1846							註(2)
1月2日	Monarch 号	2,000〃	1,173 12 —	〃	4,345 0	—	941 8 4

註 (1), (2) とともに、上海において現金で販売した結果、損失を被っている。
資料: BPP, *Select Committee Report*, 1847, p. 149.

The China Clippers, Glasgow, 1914, App. F. の概略) からみて、四〜五カ月であったと考えられるから、残りの日数は上海でストックされたことになる。なお、表11の日数の参照をなす。

(35) BPP, *Select Committee Report*, 1847, pp. 46-48.

(36) ただし、これは「現物取引に際して決定された額」を

り、現金の入手を意味しない。補表3に示す如く、現物取引の場合には、いくらか利益をあげようが、現金取引では損失を被っている。

(37) BPP, *Select Committee Report*, 1847, p. 300.

(38) *Ibid.*, p. 235. 綿紡織業者 J. Garnett の証言。

- (56) *Ibid.*, p. 48. Wニニホル(前出)の証言。
- (57) *Ibid.*, p. 55. Wニニキヤン W. Buchanan (マンガポールへの輸出貿易および中国への送金に携わるイギリス貿易商社員)の証言。また、Tニニイバリー T. Bailey (マンチエスター商業会議所の会頭)の証言に拠れば、彼は、マンチエスターにおいて茶に関する貨物保税制度 *bonding system*——輸入業者は貨物を輸入しても直ちに納税する必要はなく、それを保税倉庫に保管しておき、商機をみて納税し輸入手続を取るか、或はそのまま他に回送することも可能な制度——が広くおこなわれ、その恩恵を受けている (*Ibid.*, pp. 78-79) と茶の消費市場対策の存在について述べている。さらにまた、Gニニバルフォア Capt. G. Balfour (初代の駐上海イギリス領事)の茶税軽減を主張する証言などがある (*Ibid.*, pp. 371-372)。
- (58) イギリスにおける茶の消費増大策の主張と共に、綿製品品の輸出拡大のためにはマン輸出が減少させられなければならない (Wニニノートン W. Norton——イギリス工業製品品の輸出貿易に携わる——の証言。 *Ibid.*, pp. 45-46. Rニニバーチン R.M. Martinの証言。 *Ibid.*, pp. 291-292) に主張されている。
- (59) Wニニノートン(前出)は、茶税が現行の一重量ポンド当り2シリング2・14ペンスから1シリングに軽減され

- たならば、総経費は $35 \cdot \frac{1}{3}$ 節約できると計算している (*Ibid.*, p. 444, Appendix, No. 2)。
- (60) *Ibid.*, pp. 341-342.
- (61) この点で「ギ」は現物取引の中国開港場内部における機能について述べた同人の証言(一六〇—一六一頁、参照)がある。また、註(87)参照。
- (62) *Ibid.*, p. 105.
- (63) *Ibid.*, p. 358.
- (64) *Do.*
- (65) 内地流通、内地市場、さらに農民生産までを検討の対象を含む外国(イギリス)側の報告は、一八五〇年代から現われる「ミッチェル報告書」については田中正俊「旧中国社会の解体と西欧資本主義」同、前掲書所収。JニニAニニTニニメドズ J.A.T. Meadows の寧波に関する報告については佐々木正哉「咸豐二年鄞県の抗糧暴動」近代中国研究委員会編『近代中国研究』第五輯、東京大学出版会、一九六三年。参照)。
- (99) BPP, *Returns of the Trade of the Various Ports of China, for the Year 1849*, p. 50, Shanghai.
- (97) BPP, *Select Committee Report, 1847*, p. 64. なお、表11より一反を三ドルとして計算すると二二〇万ドルから二四〇万ドルとなり、滞貨額は一八四三年から四六年まで

の綿製品輸入総額の二三から二七%を占める。

- (89) BPP, *Select Committee Report*, 1847, p. 65. キンリーマン・メイトン商会のT=A=キム、T.A. Gibbの証言。

- (89) *Ibid.*, p. 364. G=ベルンキムの証言。

- (70) *Ibid.*, pp. 370-371. G=ベルンキムの証言。

- (71) *Ibid.*, p. 123. 中国へ出た織物camletを輸出するキリス商人J=W=ロビンズ J.W. Robberds の証言。

- (82) BPP, *Returns of the Trade of the Various Ports of China, for the Years 1847 and 1848*, p. 74, Shanghai.

- (82) BPP, *Select Committee Report*, 1847, p. 42. W=ノートンの証言。*だ' T=A=キムの証言 (*Ibid.*, p. 64)。

- (74) *Ibid.*, p. 56. W=ベルンキムの証言。

- (75) *Ibid.*, p. 91. C=カーナー C. Turner の証言。

なお、上海以外の開港場にしろは次の如くである。寧波へは上海から蘇州を経て商品が入り、現物取引価格を取引する (BPP, *Returns of the Trade of the Various Ports of China down to the latest Period*, pp. 45-46, 1846, Ningpo.)。福州では中国の茶商人は外国商人が要求する茶の対価に外国商品を受け取る。この現物取引は相方に最も利益がある (*Ibid.*, p. 9, Foo-chow-foo.)。

近代中国における貿易金融の一考察 浜一

広東では現物取引の場合、中国の産物の価格は高く (BPP, *Returns of the Trade of the Various Ports of China, for the Year 1846*, p. 39, Canton) なり、厦門を除く現物取引の例がみられる。

- (79) 一八四八年に、駐上海のキリス領事オノロマンは、従来広東へ搬出されてきた中国内地の茶を生糸は「一〇%から二〇%安価で上海で集積される」と記している (BPP, *Returns of the Trade of the Various Ports of China, for the Years 1847 and 1848*, p. 63, Shanghai)。

- (77) *North-China Herald*, July 3, 1852.

- (82) *Do.*

- (82) BPP, *Select Committee Report*, 1847, p. 335. G=ベルンキムの証言。

- (83) *North-China Herald*, December 7, 1850. G. Lanning and S. Couling, *The History of Shanghai*, Shanghai, 1921, pp. 404-405. なお、彼は一八八三年の時点と特許チャーチマン・メイトン商会の福州における買辦となつてくる (Yen-Ping Hao, *The Comptador in Nineteenth Century China: Bridge between East and West*, Cambridge, Mass., 1970, p. 232.)。

- (18) BPP, *Select Committee Report*, 1847, p. 62.

- (82) リヴァプール東インズ=中国協会の副議長C=ター

補表 4 Taysaam, Tsatlee Silk の価格変動

期 日	Taysaam 大蚕 (1 ピクル)	Tsatlee 七里 (1 ピクル)
1842 3月 8日	450 ~ 500ドル	500 ~ 520ドル
12 6	365	465 ~ 475
1843 2 21		470 ~ 480
11 24		525
1844 2 23		500 ~ 520
11 29	510 ~ 550	
1845 2 28		460 ~ 470
11 29	360	490 ~ 525
1846 2 3		
11 28	260 ~ 300	300 ~ 410

東
洋
学
報資料: BPP., *Select Committee Report*, 1847, p. 33.原資料は *Canton Register*.

第五十七巻 四六四

ナーC. Turner は、両者の格差は六%から一五%にまで及ぶと証言してゐる (*Ibid.*, p. 90)。

(83) 駐寧波イギリス領事 R. ヒートム R. Thom は、一八四六年一月と一〇月との報告において、多勢の外国商人が競って茶を購入せんとし、茶投機がおこなわれた、と述べてゐる (BPP., *Returns of the Trade of the Various Ports of China, down to the Latest Period*, 1846, pp. 49, 104, Ningpo.)。

なお、広東における生糸の価格変動については、補表 4 を参照されたい。

(84) 〆現物取引〆期における茶投機と対比されるべきものとして、一八八〇年代初頭の中国商人による茶投機とその破綻について、拙稿「十九世紀後半、中国における外国銀行の金融市場支配の歴史的特質——上海における金融恐慌との関連において——」『社会経済史学』第四〇巻第三号、一九七四年一〇月、を参照されたい。

(85) 〆現物取引〆が成立する大前提は、周知の如く、イギリス側が持つ、綿製品を販売せねばならず、かつ、茶が必需であるという条件と、中国側が持つ、茶以外に大口輸出商品がないという条件との、両者の相互規定にある。

(86) BPP., *Select Committee Report*, 1847, p. 106.

(87) 単純な現物取引である場合は、信用の欠如が前提され

るにもかかわらず、また、単純な現物取引は、それが成立している結果として、投機の余地が少なくなるにもかかわらず、中国における、当時の（現物取引）は、信用売り（掛売り）・投機の両者を併い、以上述べた如く、それらを機能せしめたのであった。

(88) イギリスの貿易商人が産業資本家から資金を借りることについては、一四三頁に既出。また、一五二頁参照。

(89) BPP, *Returns of the Trade of the Various Ports of China, for the Year 1846*, p. 42, Canton.

(90) BPP, *Returns of the Trade of the Various Ports of China, for the Years 1847 and 1848*, pp. 45-46, Shanghai. ちなみに、この一八万から二〇万ドルという額は、一八四七年の上海における茶の輸出額一八三万四千ドルの九・八〜一〇・七％に当るにすぎないが、これらの茶の運搬に要する運賃一八万ドル（トン当り約三〇ドル。*Ibid.*, p. 45 参照）の一〇〇〜一一〇％に達する。

(91) リヴァプールのラズボーン商会 Rathbone Bros. & Co. は一八五二年春、その上海支店から「オリエンタルバンクは、イギリス宛或はインド宛に振出した自身の為替が売れないと、現金を貸付けないが、それ以外では〔我々に〕役立っている」と報告を受けた (Shella Marriner, *Rathbone's of Liverpool*, 1845-73, Liverpool, 1961, p.

200)。

(92) 蘇州が、内地市場における集散地であり、かつ、内地交易の金融的中心地であったことは、一八五五(咸豊五)年二月二十七日の福建巡撫呂佺孫の上奏にも見える。

……江・浙為商賈所聚、閩・広貨物無不於江・浙售銷。

就數省而論、銀・洋（紋銀・外國銀貨）市價、閩・広聽

命於江・浙、浙江聽命於江蘇、江蘇聽命於蘇州南濠街之

各錢鋪。銀・洋之長落、惟視鋪戶之傾氣所向。（『中國近代

貨幣史資料』中国人民銀行總行參事室金融資料組編、第一

輯、上冊、中華書局、一九六四年、一九二—一九三頁）

(93) BPP, *Returns of the Trade of the Various Ports of China, for the Years 1847 and 1848*, pp. 73-74, Shanghai.

(94) *North-China Herald*, June 12, 1858.